

メルビル・デュイと図書館学教育

小 倉 親 雄

1

メルビル・デュイ (Melvil Dewey, 1851-1931) が十進分類法を創案して (1873) それを公表し (1876), アメリカ図書館協会の結成 (1876) に主導的な役割を果たし, ポストンに, “ライブラリー・ビューロー” を設立し (1876年4月), さらにコロンビア・カレッジの中に, 図書館の専門職員を養成するための独立した機関, そしてこの種のものとしては世界で最初のものとなった “スクール・オブ・ライブラリー・エコノミー” を創設した (1887) のは, 彼が22歳から36歳にわたる 壮年時代のことであった。晩年 (1916年, 65歳のとき) 彼はこの時代のことを回顧して, 如何に自分が当時夢見ることの多く, また華やかなビジョンに包まれていたかについての深い感概を洩らしている¹⁾。同時にまたこのような彼について, 世の多くの人々は専ら “虹を追う男” であると噂し合い, 現実性のない世界で徒らに理想を求めるものであるかの如き態度で接して来たにも拘らず, 結局は古い世界からめざめて, 次第にその蒙をひらき, 彼がひたすらに追い求めていた虹の “裾曳き” (trailing garments) を, いまやしっかりとその手に握りしめている現実を容認するようになったとも述べている。

このような言葉は, 彼がその壮年時代に予見していた通り, この国における図書館活動が異状な発達を遂げて来たその現実を前にしての深い感概から発せられたものである。しかもこうした言葉がなされている1916年といえは, デュイは図書館界および図書館学教育界から, 至って不本意な形において退陣することを余儀なくされてからちょうど10年目, いわば生粋の図書館人として, 失意の傷もまだ至って深かった時代のことである。従ってそこには, 彼がその抱いていた図書館についてのビジョンを現実化して行くために, 終始怒りの中に身をおき, 苦難と闘争との連続を体験しなければならなかった開拓者としての苦悩への回想が同時につきまとっている。しかもその中において, 彼を最も悩まし, 激しい闘争へと追いやり, 大学からも追放したのは外ならぬ図書館学教育の問題であった。それ故にまたデュイにとっては, このことが顧みて最も思い出の深いものとなっている。

彼は言葉が続けて, いまもし, アメリカにおける図書館発展の姿を詳細に分析して行き, 図書館活動の中で最もすぐれているものは何んであるかを検討して見たならば, 当然そこには正規に図書館学の教育を受けた人々が, 単にアメリカのみに限らず, 世界の図書館界にも果しつつある

1) Dawe, George Grosvenor : Melvil Dewey ; seer : inspirer : doer 1851-1931. N. Y., Lake Placid Club, 1932. p. 190-191.

主導的な役割がそれであることに気付くであろうとも述べている。世界における‘図書館学校運動の父’ (father of the library school movement)²⁾ としてのデュイからすれば、その直接の弟子でもあり、またそれらの人々からさらに教えを受けたいわば孫弟子たちが、その示すところによって、世界のどの文明国においても、図書館活動の上に1つの規範と規矩とをもたらし、中でも公共図書館活動を通じて、民衆教育 (popular education) の上に、偉大な活力を与えて来ている事実が特記せらるべきである点に言及している。すなわちデュイにおいては、その果して来た数多くの開拓的な諸活動の中にあっても、図書館学教育というものを、とにもかくにも、正規の軌道に乗せることのできた感動と、それにまつわる数々の追憶とが、最も大きく浮び上って来たことを物語る。晩年彼がワイヤー (James Ingersoll Wyer) に対して

1873年、十進分類法を創案して以来、図書館界に試みたすべての事柄にあっても、コロンビア大学の中に創設し、ついでオールバニー市に移した図書館学校ほどに、顧みて満足の情を与えて呉れるものはないと述懐しているのも³⁾、その事実を伝えるものである。直接には、彼が多くの迫害を犯して開校を強行したコロンビア大学内の図書館学校、またこの大学からのデュイ追放のことが決定すると、大学理事会に対して辞表を提出し、つぎにはオールバニー (Albany) 市において、経営上の苦難と闘いながらもその学校を継続して行った19年間のことどもが、顧みて最も思い出が深く、苦悩に満ちたものであっただけに、同時にまた穏やかな満足と歓びとをその晩年には与えるものともなったのである。実に彼こそは、‘世界において始めて正規に図書館員養成教育の種子を蒔いた人であり、またその種子が幾千倍にも殖えて行く姿を自身見守り続けた人’⁴⁾ ということができよう。

2

デュイが正規に専門図書館員を養成するための独立した教育機関、すなわちコロンビア・カレッジ内の図書館学校 (スクール・オブ・ライブラリー・エコノミー)、ニューヨーク州立図書館内の図書館学校 (ニューヨーク・ステイト・ライブラリー・スクール) の2つを通じて学生を直接教授したのは、せいぜい20年足らずの期間にすぎなかった。コロンビア大学のものは、1887年の1月に開校されて、2カ年足らずの1889年12月には、デュイがこの大学を去って行ったことによって実質的には廃校が決定的となり、オールバニーのものは、1890年4月に開校されたが、その校長 (ディンクター) としてのデュイの地位は、州立図書館長のそれとともに、1906年をもって放棄せざるを得なくなった。彼はコロンビア大学からは‘全く無慈悲な取扱’を受けて去らねばならなかったが、その直接の理由となったのが図書館学校の開設に外ならず、また州立図書館長ならびに州立図書館学校長の地位を去らざるを得なかったのも、教育上の見解で、ニューヨ

2) Utley, George Burwell : Fifty years of the American Library Association. Chic., ALA., 1926. p. 11.

3) Dawe, G. G. : *ibid.* p. 205.

4) Rider, Fremont : Melvil Dewey. Chic., ALA., 1944. p. 54. *American Library Pioneers*, VI.

ク州の理事者たちとの間に深めて行った大きな溝、そして反デュイ派の執ような策動の前に、その地位を固執するを潔しとしなかったためであった。しかもこの2つの地位からの引退は、同時に彼にとっては、図書館界ならびに図書館学教育界の第一線から身を引くことを意味するものでもあった。時に55歳、事実上彼の現役時代はこの年をもって終止符を打ち、極く例外的な少数の機会を除いては、図書館関係の公的な会合にその姿を見せることはなかったという。いまデュイの生涯を形づくっているいくつかの代表的な時代を採り上げて見ると、その中でも“コロンビア大学時代”、“オールバニー時代”と呼ばれているこの2つの時期は、最も悲劇的で苦悩に満ち、それだけにまた大きな足跡を留めているものである。

デュイが以上2つの教育機関を通じて、この国、さらに世界の図書館学教育の発展につくした功績についてウィリアムソン (C. C. Williamson) は⁵⁾、1つにはそれが“図書館学校のふ卵器”となって、そこから数多くの図書館学校が卵をかえして大きく成長して行き、別の面においてはまた、その卒業生たちが、国の内外に進出して、デュイの思想とその教育内容とを敷えんして行ったこととによって高く築き上げられたことを挙げている。現にカリフォルニア大学(ロス・アンゼルス)の図書館学部長であるポーウェル (Lawrence Clark Powell, 1906—) が、図書館学教育と、司書職については図書館活動全体との関係について、正しくそれは“ウィッピング・ボーイズ”(whipping-boys)としての責務から解放される訳には行かないと述べているが⁶⁾、図書館専門職員の功過、図書館活動の評定に際しての基盤をなすものこそ、実は図書館学教育の在り方であり、自然デュイにおける図書館学教育の根底に存在していたもの、またその内容と方法とは、図書館史上の重要な課題でなければならない。

3

“ライブラリー・スクール”というものについて、果してデュイが何時頃からその構想を描き始めたか、その確実な年代については明らかでないが、そうした学校に対して、はっきり“スクール・オブ・ライブラリー・エコノミー”という呼称をもってそれを公表し、図書館界の協力を求めたのが1883年8月のことであり、バッファロー市 (Buffalo) で開催されたアメリカ図書館協会の会合においてであった。彼がコロンビア大学の図書館長に就任(5月7日)してから3カ月の後である。1876年に結成されたこの協会のこうした年次総会において、このとき以前にあって図書館員養成教育の問題が討論されなかったという訳ではなく、その必要について言及された場合もあったが、はっきりした形の提案が行なわれたのは、このデュイのものをもってその最初とされている”。そしてこの節彼が説明した構想は、実のところ‘長い間脳裏に描き続けて来た

5) Williamson, Charles Clarence : Melvil Dewey ; creative librarian. p. 4. Urbana, Univ. of Illinois Press, 1943. *Illinois Contribution to Librarianship No. 1 (Fifty years of Education for librarianship)*

6) Powell, Lawrence Clark : Education for academic librarianship, in Barhard Berelson ed. *Education for librarianship*. Chic.. ALA., 1949. p. 133.

7) Vann, Sarah K. : *Training for librarianship before 1923*. Chic., ALA., 1961. p. 19.

もの'でもあった。

デュイにおけるライブラリー・スクールの発想については、1876年10月、すなわちアメリカ独立百年祭に際して、約100人の図書館人がフィラデルフィア市に集まり、“ペンシルバニア歴史協会”を会場として、3日間にわたり、いわゆる図書館人会議（Conference of Librarians at Philadelphia）を開催したとき、デュイと若干の同僚図書館人との間に交わされた討論にその起源を求めようとする人もある⁸⁾。この討論というのは、この会議の席上、ドイツのフライブルグ（Freiburg）大学図書館長ルールマン博士（Dr. F. Rullmann）が、それより2年前の1874年、フライブルグ・イム・ブライスガウ（Freiburg i. Br.）で発表した図書館学に関する意見が抄訳⁹⁾紹介され、それを中心にデュイ等有志の間に種々論議の行なわれたことを指している。ルールマンの論稿（全文28ページ）抄訳は、この会議に参集していた多くの人々からは、‘明らかに完全に無視された’¹⁰⁾にもかかわらず、デュイ等はそれに特別な注意を払ったことを物語るものである。1876年という早い時代にあつては、まだアメリカにおいても、一般図書館人たちが、図書館員に対する正規の教育とか訓練・研修などのことについて、真剣に考慮をめぐらすだけの準備を持ち合わせていなかったからである。果してデュイ等がこの時どのような順序と内容とをもって討論を展開して行ったかは明らかになし得ないが、このことが何んらかの形において、ライブラリー・スクールの構想を培う上に影響を与えたと見做す見解をあながら否定することもできないであろう。

いまルールマンが開陳している意見について、その主要な点を挙げて行くと、彼は図書館学（Bibliotheks-wissenschaft）がドイツの大学において、1つの特殊研究という形で取扱われるべきものであるという結論に立ってその論旨を展開している。すなわちドイツにおいても、すぐれた図書館行政に期待する面がいよいよ大きくなって来たこと、そのため図書館員に必要な知識と技術とが要請され、自然その資格に関する問題が大きく浮び上り、ひいてはその資格を充たす特別な教育が真剣に考慮されなければならない段階に到達したが、そのような教育は大学の課程に所属するものとして行なわれるのが最も適切であると述べている。この際は、かつてミュンヘンの宮廷図書館員であったシュレチンガー（Martin Schrettinger, 1772-1851）が、その著“Handbuch der Bibliothek-wissenschaft, Wien, 1834”において、始めて図書館員を教育する特別な学校が必要である旨を提唱していることに言及し、ただシュレチンガーのいう教育はドイツにおける主要な図書館の中で行なわれるものであるのに対して、ルールマンの場合は大学の中でそれを行なう点の相違を特に強調し、差当っては1つの大学において、のち次第に数個の大学へと拡大し、3カ年の課程とすること、学生はその課程を終了した後、大学の教授と図書館学

8) Trautman, Ray : A history of the School of Library Service, Columbia University. N. Y., Columbia Univ. Press, 1954. p. 7.

9) U. S. Bureau of Education : Public libraries in the United States of America : their history, condition and management. Special report. Wash., U. S. Govt. Print. Off., 1876. p. 623-648.

10) Vann, S. K. : *ibid.* p. 11.

の講義担当者によって構成された特別委員会による試験に合格することによって、始めて司書職に就き得る資格証書を受け、このような資格認定を受けたものだけに司書職を保障するというものであった。彼はこのような方法には、種々困難な問題がつきまとうとしても、利益の大きい結果がそれによって期待できると語っている。

なお仔細な点に及べば、語学を重視し、ドイツ語、フランス語、ラテン語、ギリシャ語は、ギムナジウムの卒業生であれば相当に熟達しているものと見做して、大学においては、ヘブライ語、英語、イタリア語、スペイン語を課外として修得させて行くこと、講義としては、

1. 一般歴史と付随研究、例えば（外交史）
2. 諸科学の体系的普遍的総覧
3. 文献作製の普遍的な歴史
4. 写本の知識
5. 印刷術の歴史
6. 図書販売史
7. 美術（図書館員が彫刻、石版、写真の価値を知ることができるよう、それらを中心とした若干の知識）
8. 図書館学（その発展と入門）
9. 図書館関係史料（著名な世界の図書館に関し、最も興味あるもの）
10. 図書館経営管理法
11. 目録分類法実習（特に写本やインクェナビラのようなむつかしいもの）
12. 公文書・古記録

の12科目を掲げている。トラウトマン（Ray Love Trautman, 1907—）ものべているように¹¹⁾、ルールマンのこの論稿は、図書館員を正規に教育して行く上の組織と、その教育課程の主題内容を掲げた近代的なプランという点においては、最も初期のものに所属する文献の1つである。

4

このルールマンの所説が、デュイにおけるライブラリー・スクールの発想に直接培ったか否かの問題は暫くおき、爾後アメリカの図書館人の間に、こうした教育のことが漸次強い関心を引くようになったことは事実である。すなわちその翌年（1877）といえば、英京ロンドンにおいて、イギリス図書館協会の第1回総会が開催された年であるが、これに参列することになったアメリカの代表17名が、真剣な討論の対象としたのも、外ならぬ図書館学校教育（library school training）の問題であったし¹²⁾、もちろんその1員であったデュイは、そのような学校の必要を力説し、ただ彼はこの場合、その学校は、大学あるいは州と直接結びつく形態を執らない間は、やはり現実的なものとはなり得ないという考え方を抱いていたことを伝えている¹³⁾。いずれにしても、1876年頃を1つの起点として、ライブラリー・スクールについての構想が徐々に培われて行ったと見做して、ほぼ差支えないであろう。

11) Trautman, R. : *ibid.* p. 7.

12) *ibid.*

13) Dawe, G. G. : *ibid.* p. 201-202.

プレディーク (Albert Predeek) によると、デュイが、図書館員養成の専門教育について、自分の構想を始めて公にしたのは、1879年のことであり、もちろん不安の念がなお伴わない訳ではなかったが、しかし結局は1883年におけるアメリカ図書館協会のバッファロー会議、ならびにそれと同じ年、コロンビア大学の理事会によってその計画が一応の支持を受ける形になったのは、一にデュイの為人に具わった、人を引きつけずにはおかない一種の磁力の然らしめたものであると語っている¹⁴⁾。プレディークがこのような言葉を使っているのは、直接には、この年デュイが、“ライブラリー・ジャーナル”誌(5月31日号、第4巻、P.147--148)に“図書館員の見習制度”(apprenticeship of librarians)と題する、短文のものではあるが、しかし至って刺戟的・示唆的な一文を掲載したことをその根拠にしているものである。明らかにこれは、デュイによってなされた図書館員のための専門教育機関、すなわち彼の言葉を借りると‘図書館員大学’(Librarians' College)についての提唱であり、これによってデュイの構想が一応の定着点に達したと見ることができる。‘この一文は、表面的に云えば、一般図書館人に、自分の考えるところを伝えるためのものであったには相違ないが、しかし恐らくはそれ以上に、自分自身の構想をそれによって見極めようとしたものでもあったろう’¹⁵⁾と語られているのは、この間の消息を伝えているものである。バッファロー会議における“スクール・オブ・ライブラリー・エコノミー”についての公表、また図書館協会に対して、コロンビア大学の中にそれを実現して行くことについて、強力なバック・アップを要請する発言を行なうに至ったのも、その構想が具体的な内容をもつものに形づくられて行ったこと以上に、実は、それより3カ月前、コロンビア大学図書館長に就任した際、この大学の総長バーナード (Frederick Augustus Proter Barnard, 1809-1889) によって彼の計画が受け容れられ、それがさらに総長より大学理事会に伝えられて、その承認を得るための過程段階にまで到達していたからでもあった。すなわちバーナードは理事会に対して、デュイを図書館長に任命することについて承認を求めると共に、その席上合せて、専門の図書館員を養成して行く教育機関(学校)を開設することの緊急について提案し、これに対して理事会は、その審議を、理事会内の図書館委員会(委員7名)に付託することになった。

この理事会においてバーナード総長が行なった提案理由の内容は、図書館員の業務が、次第にはっきりした専門職としての性格をもつものとして人々の間に認識せられるようになったこと、そして図書館員は現実に地域社会における新しい推進勢力になりつつあり、それに高い能力と、近代的な図書館精神の体得とが強く要請されているにも拘らず、そのようなものとして図書館員を育成して行く正規の教育機関を全く欠いたままであることに対して、それを真に遺憾とし、コロンビア大学こそ、率先してそのための機関を設置して行くべきである点を強調したものであった。もちろんこの提案は、総長自身の立場において為されたものではあったが、その間のいきさ

14) Predeek, Albert : A history of libraries in Great Britain and North America, tr. by Lawrence S. Thompson. Chic. ALA., 1947. p. 125.

15) Trautman, R. : *ibid.* p. 8.

つについて、‘デュイは彼が抱懐していたライブラリー・スクールについての概念をバーナード総長に対して強く移して行ったことは明らかである¹⁶⁾’とされており、もっと正確には、総長がこの節述べた趣旨の大意は、実はデュイが直接彼に与えたものであり、そこで用いられている言辭は、1883年デュイが“スクール・オブ・ライブラリー・エコノミー”と題して、“ライブラリー・ジャーナル”誌(9—10月号)に掲載したもの、あるいはまた後に(1886年)彼が、“ボストン・ヘラルド”紙の記者に対して語った際の言葉との2つを織り交ぜた形で組み立てられているとさえ云われている。事実デュイがこの大学の図書館長として招かれるようになったのも、外ならぬバーナードの要請によるものであり、しかも2人の間には、デュイの館長就任後、この大学の中に、専門図書館員を養成するための教育機関を設置することについても、事前の諒解が成立していたほどである¹⁷⁾。このバーナード総長はデュイより40歳以上も年長であり、総長に就任したのが1864年、1888年病を得て、5月7日辞表を提出、翌年4月27日80歳をもって世を去ったが、総長在任は24年という長期にわたっている。1888年彼はデュイについて‘彼と私とは10年以上の知り合いである¹⁸⁾’とのべているが、両者の個人的な接触は、恐らく“メートル法”の普及運動を通じて始まったものであろう。デュイが“メートル法の使徒”(metric apostle)となったのは、彼がまだその生れ故郷であるアダムズ・センター(Adams Center, N. Y.)に居住していた少年時代のことであり、これを普及して行くための運動は、図書館活動、さらには英語の綴りを簡潔にして行く簡易綴字法(simpler spelling)の運動と共に、彼の生涯を通じて、異状な努力をもって行なわれたものである。1876年の春(4月10日)デュイは、大学卒業後そのまま勤務していた母校アマスト・カレッジ(Amherst College)の図書館を退いてボストンに移住したが、この時創立されたばかりの“アメリカ・メートル法普及会”(American Metric Bureau)の書記長に就任、同法の普及と宣伝の実務を担当することになった。この普及会というのは、この年メートル法を支持する人々の集会がフィラデルフィア市において行なわれ、その際結成を見たものである。そしてその会長となった人が外ならぬバーナード総長であった。もともと彼はアラバマ大学(Alabama, Ala.)において自然哲学と数学(1837—1848)・化学と博物学(1848—54)、ミシシッピ大学で数学と自然哲学(1854—56)の教授などを勤めた自然科学者であり、またメートル法の熱心な主唱者でもあった。ドゥ(George Grosvenor Dawe, 1863—)が‘メートル法普及会、あるいはライブラリー・ジャーナル誌などを通じて、バーナード総長はデュイについては知悉しており、従って彼が自分の大学の図書館長にデュイを選んだことは何んら不思議とするに足らない¹⁹⁾’と述べているのは、デュイにおける“コロンビア大学時代”以前に存在していた2人の親しい間柄に言及したものである。デュイの描き続けて来たライブラリー・スク

16) *ibid.*

17) Dawe, G. G. : *ibid.* p. 236.

18) Rider, F. : *ibid.* p. 58. 12月15日付 ロウ(Seth Low)あての書簡.

19) Dawe, G. G. : *ibid.* p. 186.

ールの構想が、至って円滑な形でバーナード総長に受け容れられて行きたいきさつもまた、以上のような事情を背景にして考察したとき、却ってよりよく理解されるであろう。

バーナード総長によってコロンビア大学の理事会に提案され、図書館委員会にその審議が付托された専門図書館員養成機関設置の問題は、ちょうど1年後の1884年5月5日付をもって理事会に対する報告書の作製を完了、全員一致‘図書館を預ったり、目録作業を行なったり、さらにはまたその他の図書館活動や書誌活動を行なうために、自らを有資格者たらしめようと願う人々を教育して行く学校’の設立に賛成することを明らかにしている。同時にまたこの委員会は、コロンビア大学が、その図書館の規模・運営の実情から云っても、また大学自体が資格と学位とを授与する実力をもっている点から考えても、そのような学校を発足させて行くには恰好の条件を具備している旨を付け加えている。ただ教授内容の決定を始めとして、必要な諸準備を整えるために、猶予期間が必要であり、1886年10月1日までの約2年半をそれに充てるべきであることを勧告している。

このような委員会の審議報告に基づいて、大学理事会は、バーナード総長の提案を採択する形となったが、その際決議された事項は次の5項目である²⁰⁾。

1. コロンビア・カレッジと結びついて、図書館経営の実際を原則的に教授し、被教育者がそこで専門図書館員 (professional librarian) としての任務が遂行できるよう資格付けられる学校が設立されるべきこと。かつその学校は“コロンビア・カレッジ・スクール・オブ・ライブラリー・エコノミー”と呼称されるべきこと。
2. 前項決議によって設立される学校は、図書館委員会の指導と監督下におかれ、その委員会は教科課程の詳細をとりきめ、授業料の金額を定め、必要な管理規則を設定して、大学理事会の承認を得ること。
3. 大学図書館長は、図書館委員会の下で、また大学総長の助言と承認とを得て、‘Professor of Library Economy’ という肩書きによって、学校および教育課程全般の管掌に当るべきこと。
4. 図書館委員会に対しては、学校運営上望ましいと考える有能な図書館員、あるいは権威ある人を準備する権限が賦与されるが、この学校が必要とするどのような経費も、すべて授業料をもって支出されるべきこと。
5. 授業は、1886年10月の第1月曜日をもって開始すべきこと。

後年(3年後の1887年5月2日付理事会あての年次報告)バーナード総長が記しているところに従うと、この学校は、理事会によって設立の承認が与えられる事前において、大学当局に対しては何んら財政的な負担をかけないという責務を負わされていたという²¹⁾。すなわち第4条の決議事項はその事前誓約を条文化したものであり、一切の経費が授業料の収入によってまかなわれ、従って大学当局は、この学校の設立と運営に対しては、全く財政的な援助を行わない建前をもって臨んでいる。この学校が、その当初から苦難の道を約束されたのも、実はこのような財政的な問題にも起因するところが多い。ウィヤー (J. I. Wyer) によると、このように理事会が至って漠然とした形で、学校設立の承認を与えたことの真相は、実のところ理事会としては、それによってこの計画を潰して終う明らかな意図によるものであり、その思惑が失敗したために、

20) Trautman R. : *ibid.* p. 10-11.

21) Rider, F. *ibid.* p. 55.

第2段の攻勢が仕掛けられて来ることになったと述べている²²⁾。バーナード総長の提案採択・理事会の承認という手続も、その背景には、誠に複雑なものを蔵していたことを知ることができる。

5

1883年8月のバッファロー会議において、デュイが図書館学校についての構想を公表し、その協力を求めようとしたのは、バーナード総長によって、それについての提案が大学理事会に対して行なわれ、その審議が図書館委員会に付托されてから、僅かに3カ月を経過した許りのときである。謂わば審議検討の初期段階であって、その成行き如何は、デュイにとって非常に重大な問題であった。彼がそれを図書館協会の総会に持ち出したのは、1つには自らの決意をそれによっ
ていよいよ強固なものとして行くことにもあったが、より切実な意図には、この国の図書館人が、齊しくこの事に至大の関心を寄せており、それが実現されるためには、誰一人として援助を惜しむものはない事実を、この総会の決議という形で表明して貰いたいという願いがこめられている²³⁾。またそれがそのまま直接にはコロンビア大学の理事会に反映する許りではなく、館界一般の関心を喚び起す上にも必要なことと考えられたためである。自然デュイにとっては、彼の計画が図書館協会の賛同を得ることを願って止まなかつたのである。

しかしこれに対しては、カッター (Charles A. Cutter) を始めとする賛成者、あるいは特に反対というほどでもない人々もあったが、反面プール (William F. Poole, 1804-1868) の如く、当時館界において“図書館人中のネストール” (Nestor of librarians)²⁴⁾ と呼ばれていたような指導者・実力者の強力な反対もあった。プールはデュイの企図しているものについて、納得し難いとしたばかりではなく、結論的には、デュイの構想がもつ現実性について、図書館協会としての公式見解を表明することに対して反対であった。この反対者の中には、ボストン公共図書館のチェンバレン (Mellen Chamberlain) や、1895年ニューヨーク公共図書館が、既存の3つの私立図書館 (レノックス、ティルデン、アスター) を併合して発足したとき、初代の図書館長となったビリングズ (John Shaw Billings, 1838-1913) の如き人物も含まれている。従って活発な議論が闘わされ、その結果は至って微温的な、当らずきならず、全くどっちつかずの次の如き決議をもって結末を告げることになった²⁵⁾。

決議. 当協会は、コロンビア大学の理事会が、図書館の活動についての教育を行うことが適当であると考慮されつつあることに満足の意を表し、あわせてそれが実地に移されるよう希望するものである。

すなわちデュイの構想は参会者全員一致の承認を得るに至らず、またこのような形ばかりの決議は、コロンビア大学の理事会に対して、何んら現実的な影響を与える筈のものでもなく、従っ

22) Dawe, G. G. : *ibid.* p. 198.

23) Vann, S. K. : *ibid.* p. 24.

24) Utley, G. B. : *ibid.* p. 11.

25) Rider, F. : *ibid.* p. 43.

これが理事会に伝達されたのは、漸く1884年の5月5日のことであった²⁶⁾。しかしながらデュイがこの協会の総会において、一意承認を求めようとしたのは、図書館学教育の確立を願う余りの行動であり、時期尚早を口にした反対者たちとの間に、自然その時点の上で大きな距りがあったことを物語っている。すなわちデュイは、その構想を説明した際、

このように、私が一意皆様の協力をお願いしているのは、全国の図書館関係者に対して、私の計画しているものが、計り知れないほどの重要性を担うものだからである。それは1つには、公認された教科課程、大学によって授与された資格と学位とをもって、われわれの仕事を、専門職としての十分な地位に高めて行くことによって…

という言葉をもって結んでいる²⁷⁾。

しかしながらまだこのパフファロー会議の当時においては、果してどのような方法で、またどんな内容をもって実際に教育を行なうかについては、ほとんど具体的な段階に到達していない。ただ‘何か特殊なものを行なうとするのではなくて、図書館事業そのものに対して、得るところが最も多く、かつ役に立つ事柄²⁸⁾’を採り上げて行くという基本的な態度の域を出でないものであった。このことが結局は後において、彼がしばしば口にした‘この学校の目的とするところは、すべて実践的なことだけである’(The aim of the School is wholly practical)という言葉との深いつながりをもっている。また方法としては、講義、講読、演習の外に、図書館見学(visiting libraries)、課題法(problems method)、それに実習を課することと、できるだけ実物に則しての授業(object teaching)を行なうという方針も、当時すでに彼が大雑把にその輪郭として描いていたものである。特にまた図書館内における実習は、この国の場合においても、長い館内訓練の歴史をその背景として来た実情からも、またパフファロー会議における反対者がこの歴史の上に立ってデュイの計画を正面から批判した事情からも、彼の教育計画の中では、一貫して重要な意味をもつものとなっている。またデュイが‘課題法’と名付けているのは、当時としては至って新しい考案であり、それは著るしく今日の“事例研究法”(case method)に類似したものである。すなわちある特殊な問題や事例を課題として提出し、それについての解答を学生に求めるという方法であったが、デュイはそれによって、ある主題について徹底的な知識を身につけ、また一つの典型的な課題の究明を通じて、一般的な法則に到達する研究態度を養成して行く上にもそれが必要である許りでなく、学生の知識・技術の進歩を測る方法としても、さらにはまた学生自身にとって、自恃の精神を養うて行く手段としても、すぐれたものであるという考えであった。

コロンビア大学の理事会が、図書館学校の設立に対して示した態度は至って消極的なものであ

26) Vann, S. K. : *ibid.* p. 28.

27) *ibid.* p. 25.

28) *ibid.* p. 30.

り、後には、その計画を葬り去ることにこそ、真実の意図があったとまで評せられているほど、その承認については、制約の多い決議事項が付きまどっている。財政的な問題はその最も卑近なものであったが、しかし、設立さるべき学校の名称、大学図書館長であるデュイに対して与えられる教授としての地位と俸給（2日後の5月7日専任教授並に、3,500ドルから5,000ドルに昇給）、さらには開校期日などが正式に決定を見た以上、それから後の約2年半は、この“スクール・オブ・ライブラリー・エコノミー”の開設準備が、デュイにおける最も重大な課題であった。その1つには、教育内容の具体的設定があり、次には学生募集に必要な弘報活動があった。そしてデュイが独自に行なったこの学校についての説明内容の発表は、次第次第に理事会の基本方針から逸脱し、結局は両者の激突を必至とする段階に追いこむこととなった。すなわち1886年10月の第1月曜をもって開校するという当初の決議が、その時に至って無期延期とされたのに始まって、1888年11月5日、大学の内規を犯したという理由で、デュイに対する処置を審議した査問委員会が、この日をもってその罷免を決議したことによって最悪の事態を迎えることになった。

先ず教育内容の設定という点から云えば、1884年においても、いまだなお、その体をなす段階からは程遠い実情にある。謂わば混沌の状態であり、容易にはデュイの意図しているところを察知し難いほどである。“途轍もないトピックの行列” (a bewildering array of topics), あるいはその‘寄せ集め’ (medley)²⁹⁾と評されている言葉の通りである。そしてはぼその内容が、類型的にまとまり始めたのが、2年後の1886年、予定された開校期日も切迫した時期のことである。それらは大分けにして下記の14主題に区別されているが、デュイも述べているように、その課程内容は、古いこと (the antiquarian) とか歴史的なこと (the historical) への配慮が至って稀薄であり、‘それらは、現時の課題に、その研究が役立つ場合に限ってのみ包摂される’ という態度が執られている。このことは、決して賢明な策ではなかったとか、あるいは歴史的なものに対して蔑如的であるとか、当時においても、また後においても、批判の言葉を浴びる原因をつくったものであったが、同時にそれはまた、この学校のもつ現実的な性格をよく示すものである。他面においてはまた別の角度からする批判もあった。すなわちデュイのカリキュラムは、要するにただ‘今日では、図書館業務の職務分析と呼ばれ得るようなもので構成されているにすぎない³⁰⁾’ と。これは、デュイの課程内容を貫いているいわば実用主義的構造 (pragmatic structure) を、むしろ誇張したものと云うべきであろう。

1. ライブラリー・エコノミー (library economy)
2. 図書館の活動領域と有用性 (scope and usefulness of libraries)
3. 図書館の創設と発展 (founding and extension of libraries)
4. 図書館建築 (buildings)
5. 管理と奉仕 (government and service)
6. 利用規程 (regulations for readers)

29) *ibid.* p. 30-31.

30) *ibid.* p. 30.

7. 行政一部門 (administration-departments)
8. 特殊(主題)図書館 (libraries on special subjects)
9. 特殊な国および地区の図書館 (libraries of special countries and sections)
10. 一般図書館 (general libraries)
11. 読書と援助 (reading and aids)
12. 文献的方法 (literary methods)
13. 書誌学 (bibliography)
15. 一般集書の目録 (Catalogues of general collections)

一方また学生募集に関連する弘報活動という点からすると、その当初から大学当局と、デュイとの間には根本的な喰い違いがあった。すなわち当時のコロンビア大学は男女共学ではなく、男性のみによって学園の聖域が保たれていると考えられていた時代のことである。理事会が大学の内規と称しているのはこのことであって、男性に限って入学を許して来た従来の慣習を指すものである。従って大学当局は“スクール・オブ・ライブラリー・エコノミー”に関連をもつすべての出版物に対しては、この点特に慎重な注意を払い、‘婦人’(women)という言葉、あるいはその代名詞を使用することのないよう極力警戒するという有様であった。

デュイがこの学校についての弘報活動を主として行なったのは、コロンビア大学の名において発行した“サーキュラー・オブ・インフォメーション”(1884, 1886—87)と、もう1つは“ライブラリー・ノート”(Library Notes)の2つであった。後者はデュイ自らが執筆者・編集者・発行者の3つを兼ねていた雑誌(1886—95)であり、1886年6月にその第1号を発行、これには‘アメリカ図書館協会の書記長ならびにコロンビア大学のライブラリー・エコノミー教授であるメルビル・デュイによる編集’と明記されている。実際にこの学校が正式に発足したのは1887年1月5日のことであり、従って、それより7カ月も前に、すでにこの学校の教授名を使用して雑誌の刊行を行なったことの宣伝効果は、決して過少に評価すべきではないと云われているように³¹⁾、この雑誌は、やがて開校が予定されている図書館学校のテキストともする意図を含んでいるものである。例えば“蔵書票”のこととか、“受け入れ図書”、“函架目録”(shelf list)“目録カード”のような実務に直接結びついた事柄を始めとして、“教育者としての図書館”とか、“民衆、学者双方に対する真の大学としての図書館”、さらには“図書館事務と司書専門職”、“カード目録簡約規則”といった多岐にわたる基礎的・解説的な記事その内容としており、そのままに学習上のテキストとなり得る性格のものを多く含んでいる。それのみでなく、この雑誌は同時に“スクール・オブ・ライブラリー・エコノミー”についての情報を伝播して行く機関ともなった。その第2号において、1883年のアメリカ図書館協会パフファロー会議のことに言及しているのを始めとして、現に大学に在学中の女子学生が、その関心を司書職に向けて行くための明らかな努力が払われている。それは、新らしく図書館の司書が選ばれて行く場合、大学を卒業した女性が、むしろ大いに歓迎されている旨を述べているからである。そのことはとりも

31) *ibid.* p. 33.

直さず、コロンビア大学に新しくできる図書館学校には、女性の入学が可能であることを前提としたものに外ならなかった。後に大学理事会との間に、越えることのできない溝をつくり、終に両者の関係を破局に導いてしまったのも、外ならぬこの女子学生の入学問題であり、この点についてはその当初から何んらの調整も行なわれないうまま、謂わばデュイの独走的な態度に終始する形が見られる。それだけにまた理事会から受ける攻撃もはげしいものとなった。

7

デュイが図書館活動の分野に女性の進出を強く望み、コロンビア大学が女性禁制の学園であったにも拘らず、“スクール・オブ・ライブラリー・エコノミー”に対しては、男性と平等に、女性もまた入学が許可せられるべきであるという信念を固めたのが果していつのことであったかの問題は暫く措き、彼がこの大学の図書館長に就任すると共に、その翌月（1883年6月）にウェルズリー女子大学（マサチューセッツ州）を卒業した許りの6人の若い女性を図書館に採用するに決した（6月4日、8月15日任用）ことをもって、事実上コロンビア大学が女性に対して固くその門戸を閉ざしていたその扉を打ち破った最初であるとする見方が多い。すなわち女性のための聖戦（crusade）のスタートはこのときすでに切られていたとするが如きがそれである³²⁾。この6人の女性は、デュイ自身“ウェルズリー六人組”（Wellesley Half Dozen）と呼んでいたものであり、その中の1人であったエジャトン（Winifred Edgerton）の如きは、1886年、“重積分”（multiple integrals）という論文によって、女性として始めてコロンビア大学から博士号（Ph. D.）を獲得している。いずれにしてもすぐれた女性たちであり、自然デュイにとって、この女性の試傭という体験は、至って満足すべき結果をもたらしたものであった。そしてこのウェルズリー女子大学というのは、後に（1878年10月19日）デュイ夫人（Annie Godfrey Dewey, 1850-1922）となったゴッドフリー（Annie Roberts Godfrey）が、この大学の創立された年（1875）、創立者デュラント（Henry F. Durant）に招かれて、ミルフォード（Milford, Mass.）から来てここに勤務し、デュイと結婚するまでの約3年間、図書館の業務を担当していたところである³³⁾。彼女の後任がまたその妹（Lydia B. Godfrey）であり、自然デュイは、この女子大学からすぐれた卒業生の推せんを受けるには最も恵まれた条件のもとにあった。事実その人選については、アニー夫人による援助が非常に大きかったことも伝えられている³⁴⁾。しかしデュイ自身もまた、この学長フリーマン（Alice E. Freeman）の依頼によって、特に図書館の蔵書構成、そのための図書選択の実際について多くの助言を行ない、1882年には正式にその顧問役（adviser）に就任していたところでもあった。この6人の女子職員が図書館に採用されたことが、コロンビア大学に対して大きな影響を与えた所以は、この大学が単に学生のみに限らず、職員の内

32) Rider, F. : *ibid.* p. 78.

33) Trautman, R. : *ibid.* p. 9. *footnotes* 8.

34) Dawe, G. G. : *ibid.* p. 288.

においても、女性に対しては密封されて来た場所であったからである。その間の事情について、その中の1人であったタイラー (Martha Tyler)³⁵⁾ は、当時を回顧して次のように語っている³⁶⁾。

デュイ氏が、コロンビア大学の図書館に、6人のウエズリー女子大学の卒業生を採用した、1883年の当時を回顧するとき、彼のとった驚くべき行為に、いよいよ深い感動を覚えざるを得ない。それは当時のコロンビア大学が、あたかも僧院 (monastery) の如く、女性に対しては完全に密閉されていた場所であり、従ってこの神聖な構内 (sacred precincts) に、若い大学を出たばかりの1組の女性が突如として現われたのは、何か不吉なことの前兆の如く考えられたに違いない

と。

実のところデュイが、コロンビア大学の図書館長に就任した当時、この大学には男女共学の問題が新しく論議の対象となりつつあった。そしてそれより少し前に、理事会はこの大学においてその共学を許す問題を否決した許りのときであり、その代りに、どのようにすれば、特にこの大学が置かれているニューヨーク市の女子教育を、基準的に高めて行くことができるかを検討するための委員会 (committee) を構成したが、その委員会による報告書の提出された日が、偶然にもデュイの図書館長選任が決定を見たのと同じ5月7日のことである。‘メルビル・デュイが味わねばならなかった苦難の種子は、実は彼が図書館長に選ばれたその日に蒔かれた’³⁷⁾ と記されているのは、男女共学の問題について理事会が非常に鋭敏・強硬の姿勢を整え始めた時に際していたからであった。このコロンビア大学の理事会に対して、とにもかくにも、この大学において、女性を教育するという問題が始めて正式に話題に上ったのは1879年のことであったという。爾後この問題はつねに激しい議論の対象ともなり、いろいろ異った提案も行なわれたが、この間終始男性と全く同じ条件のもとに女性の入学を許可すべきであることを主張し、コロンビア大学をして男女共学の府とするための努力を傾けていた人が外ならぬバーナード総長である。それにも拘らず彼の提案は容易には理事会の容れるところとならず、1882年には、その望みもほとんど断ち切られたかと思われるほどであったが、一般世論の圧力も次第に加って来、終に1883年6月8日の理事会においては、女性のために1つの道を開いて行く件について票決が行なわれている。それは5月7日に提出された委員会の報告書を基礎にしたものであって、女性に対しては学外に在って、それぞれの学部の指示・指導によって、男性が学内において勉強している学科と同じものを履修させ、定期の試験を受けさせ、4年間にその試験全部に合格した女性に対しては、学士 (bachelor) の称号を与えるという方法であった。1884年から5カ年間に28名の女性がこれを志望したという。たしかに女性に対してこの大学の教育を受ける一筋の道を与えたとはいえるものの、飽くまでも大学の構内は、女性に対しては禁制の場として維持して行くという伝統はいささかも変更されていない。1888年の3月といえば、バーナード総長がいよいよ辞表を提出す

35) Mrs. Martha T. Buckham.

36) Rider, F. *ibid.* p. 79.

37) Dawe, G. G. : *ibid.* p. 185.

るに至った2カ月前のことであるが、大学理事会に対して、新しい構想をその内容とした、請願・陳情 (memorial) が行なわれている。それは範をハーバード大学に執ったものではあったが、コロンビア大学と結びついた形をもつ別個の機関 (institution) を女性のために設立することを提案したものであり、理事会はそれを慎重に検討した結果、採択を決定したことである。その機関は大学の近くに設けられて“別置施設”(Annex) と呼ばれ、そこで学生は専ら大学の課程を勉強するというものであった。もちろんこのような機関の設置は、バーナード総長が抱いて来た男女共学の構想とはなお遠いものではあったが、しかし理事会が、女性の教育に対して協力の実を示したという点において、その唱道し続けて来たものの一部が達せられたと見做すことができる。この総長の名に因んで開設された現在のバーナード女子大学 (Barnard College) は、このアネックスの発展であり、総長の死後6カ月を経た1889年10月その遺志を尊重して設立され、現にコロンビア大学総長が同時にこの女子大学長を兼務する当初の形態を存続して今日に及んでいる。

8

デュイの女子職員採用のことをもって、女性のために、密閉されていたコロンビア大学の扉を開く“聖戦”の第一歩であったとすれば、1889年1月5日、17名の女子学生を含む合計20名の“スクール・オブ・ライブラリー・エコノミー”第1回の入学生を許可したことは、正面から大学理事会の伝統的な態度に挑戦した本格的な戦いを意味する。このときにおける大学理事者たちは、デュイから見れば“女性の敵ども”³⁸⁾ (the enemies of women in Columbia) であり、一方理事会側からすれば、デュイは“理事会の権限に対する侵犯者”であった。従ってこの“スクール”開校の日は、デュイにとって、‘自分の正しいと悟ったことに対し、生命をかけての最も激しい戦いを記録する日’³⁹⁾ であったが、それは同時に理事者たちがデュイの‘ウォーターローの戦いを計画した’日でもあった。すなわちデュイはその前日、もっと正確には“ライブラリー・スクール”の第1回生が入学して来ることになっていた24時間前に、理事会を代表する大学の建築委員長から、コロンビア大学内のどの教室もこの学校のためには提供する訳に行かない旨を正式に通告されたのである。理由は入学して来る学生は、男子より女子の方が多という点にあった。大学の執ったこの処置は、結局女子学生を入学せしめる限り、開校は不許可とする方針を通達したものであり、デュイがそれを無視して開校を敢えて行なった場合には、1815年ナポレオンがウォーターローにおいて決定的な敗北を喫したと同じ運命に陥し入れようと企てたものである。そして理事会がそのために執った最後の手段は、当時ブルックリン (Brooklyn) の市長であり、1890年から1901年にわたる11年間は、コロンビア大学の総長でもあったロウ (Seth Low, 1850-1916) を委員長とする特別委員会をもって、デュイの責任を追求することであった。この

38) Rider, F. : *ibid.* p. 45.

39) *ibid.*

委員会によって彼の罷免を決定したのが、1888年の11月5日、12月3日には一応この決議の実施を無期延期とすることになったが、この月の20日には終にデュイが辞表を提出し、翌年1月7日付をもって理事会がそれを受理、図書館学校は名実ともに、3月31日付をもって廃校の運命をたどることになった。開校の日から数えてデュイの辞任までは1年11カ月、廃校までは2年2カ月、いずれにしてもまことに短命な存在であった。しかも上記の特別委員会が組織されたのは、理事会とデュイとの間に板挟みの形となり、心労の余りに病を発したバーナード総長が辞表を提出した後を受けて、代理総長となったドリスラー教授 (Henry Drisler) の意向を承けたものであり、しかも彼は、デュイに対してはむしろ敵意さえも抱いていた人であったと伝えられ、大学の内規を犯したデュイは当然喚問せられるべきであるというのが彼の主張であった⁴⁰⁾。しかしまた一説にはその提案者はミッチェル (Edward Mitchell) であり、彼と前記のロウの外には、コスター (Charles M. Da. Costa) が加って、合計3名の委員をもって構成されたとも記されている。

以上のようにデュイとコロンビア大学理事会との関係、延いては図書館学校のこの大学における運命を破局に導いた原因は、直接的には、理事会の意向を無視して、女子学生の入学を許可したということであった。もちろんそれだけがその総てではなく、“事の真相”はむしろ、デュイが図書館長に就任以来、次々に加えて行った革新的な諸政策、学生・教授の区別なく、‘規則は規則である’として、一様にその厳守を要求して一步も譲らなかった、そうした態度と人柄に対する一部教授団・大学上層部の反感と憎悪に根ざすところが多かったことも事実であろう⁴¹⁾。しかし理事会がデュイの責任を飽くまでも追求しようとしたその名目は、女子学生の問題であり、この点については、実のところ、バーナード総長とデュイ、この2人と理事会とは、その最初から別々の道を歩んでいたということが出来る。

すでに述べたように、1879年を起点として、コロンビア大学には、この大学においても女性に対する教育を考慮して行くべきであるか否かの問題が中心的な課題として登場するようになった。しかもバーナード総長は、女性の学問的な分野を拡大して行くこと、特にこの大学に男女共学を実現することをもって1つの悲願とさえしていた人であり、デュイがこの大学に来任した1883年は、大学理事会の堅持して来た伝統的な保守主義が少々緩和され始めたかに見えた年でもあった。図書館学校を創設するという問題は、バーナード総長とデュイとの協力関係 (co-operation) から始めて正しく理解されることをトラウトマンは指摘しているが⁴²⁾、バーナードには、好転的に看取された理事会の態度から、新らしく3年後につくられる図書館学校への女子学生の入学は、決して困難なことではなからうとする楽観的な見方があった。一方デュイの方は、将来における図書館活動は、女性の能力に期待する面が多く、従って図書館学校には当然女子学生を

40) *Library Journal*, V. 57 (No. 3), (Feb. 1) 1932. p. 153. Melvil Dewey.

41) 小倉親雄：メルビル・デュイとコロンビア大学。中国四国地区大学図書館協議会誌第8号，昭40年10月

42) Trautman, R. : *ibid.* p. 3.

入学させるべきものであるという点において当初より固い信念を抱いていた。結局バーナードは、この点に関する限りデュイと全く同意見であったが、しかしそれは飽くまでも‘言葉の上での’ (verbally) 謂わば個人的な諒解の域を出でないものであり⁴³⁾、正式にそれを理事会に提案し、その承諾を得たものではなかった。後に理事会はデュイの罷免を決定した際、‘女性を教室に入れることについて、承諾を与えた覚えはない’⁴⁴⁾ ことを主張しているが、‘形式的に云えば、それは正しい’ ことでもあったろう。バーナードの心労、終にはそのために病を発し、明らかにその死期を早めたとまで云われているその苦悩は、以上のような実情を背景にして、理事会とデュイとの間で板挟みの形におかれ、それから逃がれる術を終に見出すことができなかつたところに根ざしている。またデュイとバーナードは、ひとしく女性に対して、男性と全く同じ条件のもとに大学教育が与えられるべきであり、コロンビア大学といえども、決してその圏外に置かれるべきものではないという点では同じ立場に立ってはいたが、こと図書館学校に関する限りにおいては、なお多少の喰い違いが見られる。

1886年12月12日といえば、図書館学校開設の時期も、いよいよ間近に迫った時期であるが、この日バーナード総長がデュイに書き送っている書簡の内容は、その間の事情をよく物語っている⁴⁵⁾。すなわちその中で、現事会と総長との間に、この学校の問題について対立が表明化するに至ったこと、そして事態は険悪であり、従って開校は見合わせ、次のより好い機会を待つのが得策であると考える旨を伝えたものである。バーナードは、その前日の11日、シリマン(Silliman)という人が、図書館学校に女性の入学を許可するとなれば、理事会の意向に反することについて発言し、この問題を前面に押し出す態度を明らかにしたことを報じている。そして‘もし彼が、この問題を次の理事会に持ち出すことになれば、図書館学校はおそらく打ち壊わされてしまうことになるであろう’ と記した後、それに対する彼自身の見解を次のように語っている。

女性を締め出してしまおうという提案が、優勢を占めてしまった場合には、私は図書館学校を設立するという決定は、これを撤廃してしまった方が好いと思うし、また入学を希望している人々に対しても、そのような結果になるかも知れないことについて、予め注意を与えておいた方が好いと思う。そしてまた一般の人々に対しても、事態が変わって来たことの説明をしない訳には行かないであろう。しかし結局のところ、現状よりは、もっと条件の好い基盤のもとで、この図書館学校は、再建という方向をたどるものと自分は考える。この図書館学校については、理事会内には、全体としての関心は全く無いように見えるし、若干の人は、明らかに不賛成のようでもある。ここ暫くの間、その成り行きを見守り、それに委せることとしては。

すなわちバーナード総長は、図書館学校の開校にはなお“時”が必要であり、現時点においてそれを行なうことに対しては消極的であった。

1887年の1月4日、すなわち大学の建築委員長から、学内のどの教室もその使用を許さない旨の通告を受けたことに関連してデュイは、‘バーナード博士はその日の午後一杯を、総長としてでき得る限りの努力をつくしては呉れたものの、最後には終に不可能であるとして断念するに至

43) Dawe, G. G. : *ibid.* p. 184.

44) *ibid.*

45) Dawe, G. G. : *ibid.* p. 187.

った'⁴⁶⁾と述べている。バーナード総長としては、大学理事会がこのような強硬な態度をもって、その伝統的な立場を堅持し、それに背反するものに対しては断固たる措置をもって臨むことを明らかにした以上、この図書館学校の場合においても、女子学生の入学を許す形での開校は結局不可能であるとして、彼がこの学校に托して来たこれまでの希望も終に放棄しなければならないと観念するようになったことを伝えているものである。

これに対してデュイの場合は、如何なる事態が訪れるとしても、女子学生の入学許可は当初からの前提であり、‘私は瞬時といえども、ライブラリー・スクールが結局は誕生し、存続し、そして大きくなって行くに違いないという信念においては、微動だにしたことはなかった’し、‘いつの場合においても、女子学生の方がその数において多いことを予測していた’と語っている⁴⁷⁾。その点バーナードの方は、彼の理事会の中に占める総長という特別の立場から云っても、自然万事穩健であり、これに対してデュイの方は最初から攻勢的な態度をもって一貫している。そしてそのための体制を早くから準備し、それに必要な言動を意識的に展開して行った証跡を明らかに留めている。

1886年の3月といえば、一応予定された図書館学校の開校期より半年ほど前のことであるが、その月の13日、大学同窓会協会(Association of Collegiate Alumnae)において行なった講演“大学卒の女性に対する専門職としての司書職”(librarianship as a profession for collegiate women)⁴⁸⁾は、上述の彼の意識的な言動をよく物語るものである。彼はこの講演において先ず“ウェルズリー6人組”が、コロンビア大学図書館で過去3年間、いかにすぐれた実績を示して来たかに言及するとともに、図書館活動のあらゆる面に女性の能力が大きく期待されていること、図書館学校というものには、女性は入学して行くことのできるものであり、またそうすべきであり、当然そのようになって行くであろうことを強硬かつ率直に述べている。同時にまた単に司書職のみに限らず、あらゆる種類の専門職の中に、女性はその地位の認知と榮譽の2つを、全く男性と平等に与えられるべきであるとするのが彼の主張であった。後年デュイに対しては、その男女同権運動に尽した偉大な貢献が特記されるようになったが⁴⁹⁾、彼の場合における運動は、主として教育と専門職の場を通じてであり、図書館学校の問題は、その立場からも、正しく‘生命を賭しての戦いの場’とならざるを得なかった。‘もしデュイが、その根源となるものを勇敢に戦いとることをしなかったとしたら、おそらく図書館事業の中に女性が入りこんで行く時期の訪れも、はるかに遅いものとなってしまったであろうし、また現在にあってさえも、数において非常に少なく、その地位もまた至って低いものとなっていたであろう’⁵⁰⁾と語られているの

46) Rider, F. : *ibid.* p. 44.

47) *ibid.*

48) An address delivered before the Association of Collegiate Alumnae, March 13, 1886. *Boston Library Bureau.* (Dawe : *ibid.* p. 374, Bibliography)

49) Rider, F. : *ibid.* p. 80.

50) Rider, F. : *ibid.* p. 78.

も、デュイのその際に執った果敢な行動、すなわち‘規則も秩序も、理事会も教授団も無視して’⁵¹⁾ 女性の入学許可を強行したことの、後に及ぼした大きな影響に言及したものである。

明らかにデュイは、彼の編集責任のもとにおかれていた“ライブラリー・ノート”の創刊号(1886年6月)においても、新らしくできるコロンビア大学の図書館学校では、入学を希望する“大学卒の女性”を募集している旨の情報を流し、またこの年3月の上記講演の内容も、そのままの題名で“ボストン・ライブラリー・ビューロー”誌上に掲載したにもかかわらず、大学の出版物である“サーキュラー・オブ・インフォメーション”においては、“for college-bred-women”という語を意識的にその題名の中から削除している事実が指摘されている⁵²⁾。‘デュイは、時にはまた故意に、人々を迷わせるような方策を執ったり、自分自身に向けられる大学当局の鋭鋒を巧みにかわすような便法さえも用いた’と云われるのは、明らかにデュイが、この図書館学校をもって、同時にまた、コロンビア大学の門戸を固く閉ざしていた女性禁制の扉を打ち破る突破口とする決意をその最初から蔵していたことを伝えるものである。結局理事会との間に引き起された紛争は、‘コロンビア大学内における保守主義と自由主義との戦い’⁵³⁾ であり、女子学生の問題についての彼の積極果敢な態度が、最後には勝利を収めるに違いないとの信念のもとに行動し、強くそれを支持して来た人が外ならぬバーナード総長であった⁵⁴⁾。

9

図書館学教育の歴史の上において、始めてその燈を大きく掲げることになったコロンビア大学の図書館学校“スクール・オブ・ライブラリー・エコノミー”の開校は、以上のような事態を背景にしたまま、デュイによって強行されたものである。せいぜい10名程度の学生であろうという最初の予想を上廻って、実際には20名であり、さらにコロンビア大学の職員が加った。しかも20名のうち17名が女性であり、3名が男性、地域的には全米にわたっており、イギリスから来た学生(George Catline) 1名も含まれている。1886年の12月末といえば、正にこの学校の開校寸前の時期に該当するが、その第1回の入学者中の1人パテン(Frank C. Patten)は、‘デュイ氏のオフィスを訪れていささか驚ろいた’⁵⁵⁾ と記している。すなわちやがて発足しようとする学校のことであり、従って万端の準備が整っているものと予想していたにも拘らず、全くそれどころではなかったからである。‘われわれは辛棒強く自分を持して行くことと、デュイ氏を信頼する以外には全く術がなかった’と語っている通りの姿が、当時の実情であった。

開校の前日、コロンビア大学内のどの教室も、その使用を禁止されたデュイは、守衛達と学生には、入学志望者が予想の倍数に達したこと、そのためそれだけの数を収容できる部屋が見つ

51) Rider, F. : *ibid.* p. 80.

52) Trautman R. : *ibid.* p. 13.

53) Dawe, G. G. : *ibid.* p. 185.

54) Rider, F. : *ibid.* p. 55.

55) Rider, F. : *ibid.* p. 45.

らないという説明でもって納得させ、礼拝堂の外側にあった倉庫を使用する以外に方法がなかった。

彼等は、荷箱を運び出し、掃除をし、磨みをかけ、間に合かせの針金を挿しこみ、ひっくり返ったテーブルを入手して、それに落ちた脚を釘着けにし、半端ものの椅子を捨て来、さらに不足の分は、自分の家から運搬したりした。終始自分は笑顔をもって、いささかも自分たちが皆、いま火山上に位置していることについての暗示を与えないようにして、第1回のクラスを迎え入れ、かくて初めての図書館学校が船出することになった⁵⁶⁾

と、自らその日のことを回顧している。すなわち学生たちは、当時デュイがどのような困難に直面していたかについてはほとんど知るところがなく、それを知らされたのは、ずっと後のことであったという。古い建物、仕上げの粗末な床、ガランとした部屋、それがこの学校の授業に充てられた場所であったが、しかし‘われわれのクラスは、開拓者精神をもって染められ、不便なこと、即席仕立ての施設などのことに対しては、何んら意に介するところはなかった’と上記のバテンは語っている。

しかしながら、この開校の翌年にあたる1888年が、デュイにおける“コロンビア大学時代”の中でも、最も苦境におかれた年である。その1つは、1876年以来、彼がその経営の任に当たっていたボストンの“ライブラリー・ビューロー”の失敗である。これは実に世界における最初の、図書館用品を取扱う専門店であり、デュイの1つの信念から生み出されて来たものであった。すなわち専門職 (a profession) というものは、それ自体の機関誌 (journal)、団体 (association)、をもち、さらにはその専門的な要求に合致するよう特別に創意の加えられた用品類の発達を図って行かなければならないというのがそれであり、そうした品物を製作し、かつ供給する事務所がこのライブラリー・ビューローであった。しかしその経営が、財政的な窮地に追いこまれたのがこの1888年であり、私財5,000ドルを前払いし、さらにコロンビア大学から借り受けた同額の金額を注ぎこんだにも拘らず、この年の4月をもって倒産の運命をたどったことである。

加うるに5月7日にはバーナード総長の辞表提出があった。これによって終始大学理事会とデュイとの間に立ち、その攻撃を緩和する役割を果たして呉れた当事者を事実上失なったことによって、いわばその防壁が完全に取除けられた形になり、デュイは理事会と教授団からの追撃に対して、正しくその矢面に立たされ、最も傷つきやすい孤立無援の立場に放置されることになった。そしてデュイが図書館学校の開校を強行した後、つぎつぎに固められて行った攻撃の足場は、終に彼を最後の窮地に追いこんで行くことになった。すなわちデュイが図書館学校に女性の入学を許可したのは、バーナード総長による暗黙の承認を得たものであったために、彼が理事会に背叛した行動をとったとか、あるいはまたその意志に反してそのような措置に出たと断定する根拠に欠ける点がないでもなかった。一方また大学には、女性の入学を禁ずる規程 (statutes) があったことも事実であり、また大学総長に対しては、そのような規程を運用する権限に、ある程度の幅が許されていたこともまた事実であったという⁵⁷⁾。従って理事会としてはまず、その点の遺漏

56) Rider, F. : *ibid.* p. 44-45.

57) Trautman, R. : *ibid.* p. 19.

を修正し、整備しておく必要があった。1887年5月2日に新しく制定され、7月1日をもって施行されることになった規程（第5章第6節）は、すなわちこの意図に出たものであって

女性、婦人のための特別コース（collegiate course for women）以外には、特に理事会の指示ある場合を除き、如何なる学部とも、学生にして入学することは許されない。

ことを確認したものであった。特別コースというのは、すでに述べた“アネックス”における課程を指している。この新しく修正され、明確化された大学規程によって、デュイの執った処置が、たとえバーナード総長の内諾を得たことを理由としても、明らかに大学の法規に触れることがあらためてここで確認されることになった。このようにデュイ追撃の足場が徐々に固められつつあった事態の下では、バーナード総長が、図書館学校のために、便利な教室と講堂とが別個に確保されるよう、また課程を修了した学生に対しては、学位と、さらに大学の印章を捺した資格認明書が与えられるべきであることを勧告しても、理事会の反応は全くなく、またデュイが、この学校のために、図書館のホールを改修し必要な設備を行うための費用として、2,263.75ドルを財政委員会に要求しても、古いホールをそのままに使用するようとの回答を受けとっただけで、その要求は拒絶され、また6月には、デュイからこの学校の名称を“スクール・オブ・ライブラリー・サイエンス”と改称したい旨を申出で、これに対して理事会が‘名称の変更は適当でない’として拒絶したことなども記録されている⁵⁸⁾。この間の消息についてトラウトマンは‘理事会がこの学校のことについて配慮を加えているとか、あるいはそれを支持して呉れるなどと期待しても無駄であることを、バーナードとデュイの2人に警告する点においては役立ったであろう’⁵⁹⁾と述べているように、理事会は最早やこの学校のためには、いささかの力も藉そうとするものではなかったのである。

1888年の11月5日のデュイ罷免の決定は、12月3日一応それを延期することになったとはいうものの、デュイと理事会との従来の関係を結局破局に導いた最終段階を意味する。同時にその直後はまたバーナードが、デュイ擁護のために最後の努力を試みた期間でもあった⁵⁹⁾。彼のその努力は12月15日、査問委員会の長であったロウに対して、デュイが如何にコロンビア大学の図書館を改善するために献身し、顕著な業績を成し遂げたかについて詳細に語り、こうした人物を失うとしていることが、コロンビア大学にとって如何に大きな損失であるかを述べたものである。そして‘有能の誉高い人をもってその空席を埋めることは決してむづかしいことではないであろう。しかしながらその人の全精神が自己のプロフェッションに対する献身で充滿しているような人を、一体どこで見出せるであろうか’⁶⁰⁾とも付け加えている。しかしながらこのロウあての書簡は、実はすでに新聞紙上において、デュイがワシントン州の首都オールバニー（Albany）にある州立図書館長兼州立大学理事局書記長に就任方を懇請されていることが報道された後においてなされたものであって、このことについて彼は‘デュイ氏はすでにそれを受諾した旨の記載はない

58) Trautman, R. : *ibid.* p. 16.

59) Dawe, G. G. : *ibid.* p. 329-330.

が、しかしたとえ彼がそれを受けたとしても、これまでのことを振り返って見れば、私は決して驚ろいてはならないであろう’とも記している。すなわちこの書簡は、そのような諦めを基にして病床において書き綴られたものであり、デュイ罷免の理事会決定をくつがえすための努力というよりは、実は、デュイ追放の別個の、しかも根強い背景をなしていた教授団の反デュイ的感情は、むしろ誤解に基づくものであり、彼が教授団からとかく受け勝ちであった非難と不平苦情は、結局デュイがこの大学の図書館に示した‘過度極端な熱心さ’に起因する点を説いて、理事会の蒙を幾分でも啓こうとした最後の誠意と見做すべきものであろう。デュイが正式に理事会に対して辞表を提出したのは、それより5日後の12月20日であった。

10

1889年3月31日付をもって名実共に廃校となったコロンビア大学の図書館学校と、4月1日付をもってオールバニーに発足したニューヨーク州立図書館学校との関係については、その解釈が必ずしも従来一致しているとは限らない。一般にはその移転・継続であると見做す表現が行なわれているが、トラウトマンは、‘コロンビア・カレッジにおいて発足したものが、オールバニーに移されたというよりは、あらためてデュイによって、新しくこの地に設立されたといった方が適切である’⁶⁰⁾と記して、むしろ別個のものとして理解すべきであるとの解釈をとっている。事実この間のことに触れた記載はまことにマチマチである。コロンビア大学のものがオールバニーの方に‘デュイに随伴して来た’とか、‘コロンビア・カレッジからオールバニーに移された図書館学校がここで再建されることになった’とか、それぞれに多少異った語感を付してそれが行なわれている。またコロンビア大学当局が正式に使用した言葉は、あくまでも‘学校の閉鎖’⁶¹⁾であり、オールバニーのものは、この大学とは何んらの関連をもたないものであった。もともとデュイが、オールバニーに招かれるようになったいきさつは、至って偶然のことにその源を発している。それは1887—88年の冬、当時ニューヨーク州立大学理事局の一員であり、1889年にはフランス駐在公使、1905年からは駐英大使となったリード(Whitelaw Reid, 1837-1912)がこの理事局の管掌下にあった州立図書館を改革する案に関連してデュイの助言を求めたことがそのきっかけとなっている。ためにデュイは自身オールバニーを訪れ、州立図書館がおかれていた諸般の事情を詳細に調査し、11月25日(1888)、リードを通じて理事局に対し、それについての意見書を提出している。全文9カ条から成るその覚書(memorandum to the Regents)は、単に州立図書館のことにのみに限らず、同時に理事局の正に在るべき将来の姿にも触れたものであり、その中、重要な諸点については、理事局もまた全く同一意見であった。そしてそのような構想を実地に移して行く行政事務上の責任者として、デュイをその書記長(secretary)に迎えんとする気運が急速に醸成されたのである。ときあたかもコロンビア大学における彼の地位が全く危

60) Trautman, R. : *ibid.* preface.

61) Trautman, R. : *ibid.* p. 22.

殆にひんしていた時でもあり、実際にデュイが、コロンビア大学と袂を別つ決意を固めたのは、彼の意見書が認められてから、恐らくは1週間を出でない間のことであつたろうと推定されている⁶²⁾。特にその第9条において彼は、理事局に対しては、州内公共図書館の監督という重要な責務が課されている点を強調し、それに関連して、図書館員の教育・研修の問題に触れ、‘ニューヨーク州は10校を下らない師範学校を創設し、正規の教育を受けた教師の需要を充たして来たという点で、他のすべての州に対し指導的な役割を果たして来た。それと同じように今度は、有能な図書館員を養成して行くための教育センターを持つべきであり、そのようにして正しく教育され、資格づけられた図書館員をもたないままでは、満足すべき図書館の発展は到底あり得ないだろう’と述べているが、このことをもって、デュイは、コロンビア大学に創始した図書館学校を、今度はオールバニーに移す意図を明らかに蔽っていた証拠と見做しているものもある⁶³⁾。いずれにしても、この点における彼の意見が採択されたことは、たしかに1つの光明であり、正に断絶の危機にさらされたままの図書館学校の命脈を、とにもかくにも繋ぎとめる可能性をのぞき見ることのできるものであった。

デュイのニューヨーク州立大学理事局書記長兼州立図書館長(Director of the State Library)への選任決定を見たのが1888年12月12日、コロンビア大学に対する辞表提出が8日後の20日、州の職員としての正式発令は、翌年の1月1日、コロンビア大学によって正式に辞表の受理されたのが6日後の1月7日であった。そして州の職員となつてから早くも12日後には、州立図書館の業務に結合した形での、図書館員養成教育に対する彼の計画について承認を求めると共に、大体4月1日前後の時期に、コロンビア大学の図書館学校において使用して来た図書・機械器具その他の参考資料をオールバニーに移すことについても、同様州理事局の諒承を求めている。すなわちデュイとしては、コロンビア大学そのものには何んらの未練もあつた訳ではないが、図書館学校をこの大学限りで断絶の運命に置くことは忍びがたいところであり、逸早くこれをオールバニーにおいて再発足させるための諸般の準備に着手している。しかもそれは転出が決定し、コロンビア大学に辞表を提出した直後のことのように思われる。すなわち1888年中に(月日は不明)、時のコロンビア大学代理総長ドレスラーから、オールバニーの州理事局に対して、‘図書館学校を提供する’旨の書簡がすでに送達されていることをデュイ自身が、しかもオールバニー赴いてまず最初に認めた覚書(minutes)の中に書き留めているからである⁶⁴⁾。そしてまた1889年2月4日には、代理総長から、デュイがこの学校をオールバニーに移したいとの申出を行なつたことが伝えられ、この学校の処置について審議中であつた図書館委員会は、その移転に喜んで賛成する旨回答したことも記録されている⁶⁵⁾。いずれにしてもコロンビア大学は、この図書館学校の放棄をいささかも意に介するものでなかつたことを、これらの事実は如実に物語るものといえよ

62) Rider, F. : *ibid.* p. 89, 90.

63) Rider, F. : *ibid.* p. 90.

64) Dawe, G. G. : *ibid.* p. 196.

65) Trautman, R. : *ibid.* p. 20.

う。

一方また州理事局側の態度としては、そうした学校の経営が、実質的に州に対し、財政的な負担を伴わないものであれば、特に問題とするには足りないといった程度のものであった。従って金も人も建物や施設も、そのために特別配慮する約束が為された訳ではなく、授業を担当する教師たちも、ただ自分たちが、すぐれた仕事に携わっていることの喜びを得ただけで、そのために別個の報酬が与えられた訳ではなく、本務を果しながらのそれは奉仕であり、実際には勤務時間の終わった後の夕方、休祭日、それぞれの休曜日などをそれに充当して行くという有様であった⁶⁶⁾。従ってデュイが直面した最も困難な問題というのは、やはり財政面のことであった。すなわちこの学校が発足した4月の末か、あるいは5月の初めのことであったろうと推定されているが、彼が直接カーネギー (Andrew Carnegie, 1835-1919) 夫妻を訪問しているのも、実はこのことに関連している⁶⁷⁾。しかも何んらその支持を受けるに至らなかったことは、後カーネギーが、例えばウェスタン・リザーブ大学(クリーブランド)に多額の基金を提供し、その一部をもって図書館学部が創設されたことや(1904年)、その翌年には、南部図書館のため、その地域教育センターとしての“南部図書館学校”(Southern Library School)をアトランタ (Atlanta, Ga.)に創立する基金、1911年には“ニューヨーク市公共図書館図書館学校”を発足するための基金などを提供し、その在世中においてさえも、図書館学教育の発展に多くの寄与を行なっている事績を想起するとき、いささか奇異の感がしないでもないが、しかしながらその当時においてはなお、カーネギーはこの面における関心を殆んど示すに至らなかった時代のことであった。5月15日付デュイに書き送っている彼の書簡は⁶⁸⁾、よくこの間の事情を物語っている。‘貴下の御訪問によって私は始めて図書館員のための教育について耳にした。その節貴下の語ったところは、すべて私には興味の深いことではあったが、しかしそうかといって、私が貴下に基金を提供すると約束したように理解されたとしたら、それは間違いである。これは熟慮を必要とする事柄だからである…’というのがその内容の要旨である。結局はデュイの申出に対する拒絶に外ならなかった。ニューヨーク州立図書館学校が、終始財政的な苦境を体験しなければならなかったいきさつの背景には、当初におけるこのような出来事も含まれ、この訪問後デュイがカーネギーに語っている言葉は、コロンビア大学にそれを創始して以来、この時に及ぶ事情をよく物語っている⁶⁹⁾。

ここ4年間というもの、私はこの事業を、自分の個人的な儀せいにおいて継続して来た。しかしながら、その成し遂げた善事は、私の多くの楽観的な期待を築り越えるものとなって来た。すぐれた図書館人の多くはこの図書館学校が、近代的な図書館の発展においては、はるかに、また最も重要な要素をなすものであるとして、それが立派に継続されて行くべきものと見做してはいる…これまでの学生全員の中、ほとんどその10分の9までは女子学生である…著名な図書館人たちが、外部から来て、実際にこの学校の授業を担当して呉れた訳であるが、彼らの全部を、その滞在中、私は個人の経費でその費用をまかない接待している。それで

66) Dawe, G. K. : *ibid.* p. 199.

67) *ibid.*

68) Dawe, G. G. : *ibid.* p. 200.

69) 1890年5月12日付 (Dawe, G. G. : *ibid.* p. 201)

こそ、この学校の維持にほとんど経費を必要としていない。とはいっても、これからもずっと従来通りお願いして行くとなれば、ただ車賃だけ払っておればよいという訳にも行きかねる…私は、多年にわたり、誰かがこのように必要とされている援助を保証するため、その手を差し延べることをもって、自分の特典であると感じて呉れる人があるに違いないことを確言して、自分自身にとって可能な範囲の、従って限られた方法でもって、学生たちのために苦闘し続けて来た。私達はこの学校のために、夜間働いたり、祭日をそれに使ったり、さらには勤務時間後を充当したりして、いわば重い荷物を背負って来たのである。しかしそれもやはり限界に達してしまい、心配しておった通りに、2个月前には、最初からこの学校と行動を共にして呉れた最もすぐれた教師の1人も、フロリダ (Florida) の方へ去って行かざるを得ない羽目になってしまった。

すなわち、図書館学校という全く新しい企画に対して、それを理解し、さらには経済的援助を申出でて呉れる人が必らず現われて来るに違いないという考え方が、デュイには1つの信念のような形で存在していたのを知ることができる。そして結局はカーネギーをその人として選んだにも拘らず、それを拒絶されたことは、オールバニーの図書館学校もまた、その最初において、正しく‘不可能なことを、とにもかくにもやり始めて見る’⁷⁰⁾より外には、その術がなかった事情を一層深刻なものにしたというべきであろう。このようないきさつは、デュイの歿後7年目(1938)の4月5日、ニューヨーク・カーネギー財団からコロンビア大学に寄贈された15万ドルを基金として、図書館学部に、“メルビル・デュイ図書館学講座”⁷¹⁾(Melvil Dewey endowed Professorship of Library Service)が創設され、今日に及んでいることと思い合わせるとき、その間カーネギーならびに同財団の図書館活動に対する大きな変化に深い感概を覚えずにはいられない。この講座は、アメリカの図書館学校における最初の寄付講座であり、リース教授(Ernest J. Reece)が始めてそれを担当、現在はトゥーパー教授(Maurice F. Tauber)がその教授職(Melvil Dewey Professor of Library Service)に就任している。それと同時にカーネギー財団はまた、この学部に対しさらに10万ドルをこの学部全般の目的に使用する基金として提供している。

デュイが、ニューヨーク州の理事局に対し、この学校開設に伴う経費、人員・施設について、敢えて特別の要求を行わず、ただその許可を得ることのみに留まったことは、一意図書館学校の断絶を怖れたためであり、このように図書館学校が、コロンビアのような有力な大学の許を離れて行くことを考えると、こうした形を執ること自体は決して理想的なものと考えていた訳ではなかった。‘しかしデュイは、この図書館学校が現に置かれている深刻な事態を考え、いまや二者択一の術もないことを十分知っており’⁷²⁾、従って、オールバニーにおいて、引きつづきその命脈を保って行くことができるとしたら、その危機を一応脱することができるばかりではなく、彼自身にとってもまた、大きな救いとなったからである。‘もしもデュイが、この学校を護って行かなかったとしたら、まず確実にそれは、コロンビア大学において死滅する運命を迎って

70) Dawe, G. G. : *ibid.* p. 199.

71) Trautman, R. : *ibid.* p. 43.

72) Rider, F. : *ibid.* p. 52.

いたであろう⁷³⁾と評されている通りの情態が、実は当時における真実の姿であった。

そのみならず、デュイがその始めにおいて、州立大学理事局との間に行なった話し合いの中には、実はもっと現実的な事柄さえも含まれている。それはここで受講する人々は、‘給料を受けとる代わりに、授業を受けることができる’ということであり、デュイが理事会に対して承認を求めた際のプランは、直接の対象を館内職員におき、州立図書館の中で勤務しながらの受講であり、従ってその勤務に対する報酬を受けず、その代わりに受講の特典が与えられるという構想に発するものであった⁷⁴⁾。その点コロンビア大学の図書館学校が、授業料の徴収によって諸経費をまかなうとしたのに比較しても、はるかに消極的であり、一步後退した考え方といえるであろう。同時にそれは、州立図書館における人員不足を補う賢明な手段とも解されるものであった。州理事会が、特別の異議を挟むべき理由を持たなかったのも決して不思議ではない。

11

オールバニーのニューヨーク州立図書館学校は、1889年4月1日をもって発足したが、1926年の秋学期終了とともに、37年間にわたり、1,992人(1,079名は正規の2年課程、913名はサマー・セッション、学士号授与者335名)という大量の学生を育成したその歴史を閉じることになった。コロンビア大学が、このニューヨーク州のものと、1911年に開設されたニューヨーク市公共図書館内の図書館学校との2つを吸収して、新しく図書館学部“スクール・オブ・ライブラリー・サービス”を発足させることになったからである。9月23日がその始業の日であり、10月1日盛大な開校式が“McMillin Academic Theater”において行なわれている。しかしながらデュイが、オールバニーの学校に校長として在任していたのは、1906年の1月1日まで、正確には1905年一杯をもって退職したために、16年8カ月であった。そしてこの期間は、コロンビア大学とはいささかの関係ももたないものであり、従って、例えば現在のコロンビア大学図書館学部の学生便覧⁷⁵⁾などに、

大学院課程のこの図書館学部は、この種のものとしては、合衆国最古のものであり…1887年にメルビル・デュイによって開設され、1889年からは、オールバニーにおいて運営されていた。そして1926年には、ニューヨーク市公共図書館のものと一しょにされ、この大学に帰って来た。

と記載されているような表現、すなわちあたかもこの期間もまた、コロンビア大学図書館学部の一部を形づくっているかの如き印象を人々に与える表現は、トラウトマン教授も述懐しているように、やはり‘いささか厚顔すぎる’⁷⁶⁾とも云えるであろう。

コロンビア大学のものと、オールバニーのものとは、もちろん設立主体を全く異にする別個のものではあるが、しかしコロンビア大学の理事会と、ニューヨーク州立大学理事局との間に取り

73) Mitchell, Sydney B. : The pioneering school in the middle age. *Library Quarterly*. Vol. 20, (No. 4. Oct.) 1950. p. 272-288.

74) Trautman, R. : *ibid.* p. 24.

75) School of Library Service, *Columbia University Bulletin*.

76) Trautman, R. : *ibid.* p. 23.

交わされた協定によって、一部の教師、図書類、参考資料、機械器具類など一しょに、548.05ドルの金額が移し替えられることになった。この金は諸経費一切を支払った上での授業料の残額である。また一方コロンビア大学の図書館学校の方に学んだ学生(1888;1889)で、所定の単位を充たし、試験に合格し、さらに10カ年の図書館実務の経歴をもつものに対しては、図書館学学士(B. L. S.)の学位を授与し得ることが、1900年オールバニーの学校では決議されている⁷⁷⁾。これはコロンビア大学が、それらの学生に対して執った極めて冷淡な態度と対照的である。すなわちその学校閉鎖に際しても、ここに学んだ学生たちに対して、コロンビア大学は何んらそれを証明するもの(certificates)を授与しなかったのである。そのため学生の1人であったポールドウィン(Elizabeth G. Baldwin)が中心となり、署名款願の運動を展開し、2年後の1891年3月20日付をもって、ようやく時の総長であり、かつてはデュイ査問委員会の長であったロウの署名を‘汲々ながら’得ることに成功したという有様であった。まさしく“時期おくれの証明書”(overdue certificates)であり、しかもそれは大学のシールもなく、またリボンもつかず、さらにはまたそれが大学理事会の決定に基づいている旨の言葉も見当たらない、まことに粗末なもので、一括ポールドウィンに手渡され、彼女はそれを普通の手紙のように折りたたんで、各個人あてに郵送したという。また証明書の文面というのは

(誰々は)コロンビア・カレッジに結びついている“スクール・オブ・ライブラリー・エコノミー”の、1887—1888年度始めから、1839年4月1日の閉鎖に及ぶ間、その中の1員であって、所定の課程を立派に遂行し、かつ、すべての必修試験に合格したことを認明する。

という、単なる在学・単位修得の事実を証明する至って事務的なものであった⁷⁸⁾。

以上のように、デュイのみならずコロンビア大学時代における教授スタッフの一部、図書・備品類、経費残額がそれぞれオールバニーの方に受け継がれた形となり、また廃校に伴う学生の善後措置が講ぜられているところから、この2つの学校は、とかく移転・継続・継承の形で理解されている場合が多い。しかしあくまでもそれらは外観・形式上の問題であり、実質的にはコロンビア大学はそれを放棄し、閉鎖・廃校の処置に出たものであり、オールバニーのそれは、州立大学理事局の管轄下、州立図書館長の管掌として、新らしく発足したものであった。

オールバニーの学校がおかれていた20世紀初頭の実情は、ミッチェル(Sydney B. Mitchell, 1878—)によってよく伝えられている⁷⁹⁾。彼はモンリオール(カナダ)の生れであり、同地のマッギル大学(McGill Univ., 1821年創立)において、学士・修士の課程を修了した後、1903年にこの州立図書館学校に入学し、卒業後はカリフォルニア大学図書館副館長・同大学図書館学科長(Chairman, 1923)、ミシガン大学図書館学教授(1927)を経て、再びカリフォルニア大学に帰り、図書館学部教授(1927)・同学部長となって、1946年に定年退職した人である。従って彼の入学したのは、デュイの晩年、すなわちその退職する3年前の図書館学校であったが、それ

77) Trautman, R. : *ibid.* p. 24.

78) Trautman, R. : *ibid.* p. 22.

79) Mitchell, S. B. : *ibid.*

は「落ち着いた小さな町」オールバニーの岡では、一番高いところに位置していた州議事堂の中、その頭部階床の一部を充当されていたものであった。議事堂の建物自体が、19世紀の後半、特に1880年代のアメリカ建築界を支配していた“リチャードソン様式”(Richardsonian)と呼ばれるもの、すなわち壮重・重厚・豪華になる記念碑的なロマネスク建築であり、従って無駄と非能率機能的には不便の大きいものであった。図書館学校に充てられた場所はこの石造建築の北面であり、自然オールバニーの町では、ここが一番寒い場所であったという。中でも外来講師の授業が行なわれる部屋は最もひどく、カナダのクイベック(Quebec)においてさえ、未だ体験したことがなかった程のきびしさであったとミッチェルは記している。そのみならずその部屋は、他のものより一段と高い場所に位置しており、そこに至る階段は、汽船の上甲板に昇る場合と同様に、至って傾斜の急なものであり、従って重量級の人物にはむしろ危険な代物であり、そこを昇って行く学生たちの姿、中でも、冬季着ぶくれた女子学生が、小柄な男子学生に背後を見守られながら、よじ昇って行った光景だけは、いつまで経っても脳裏から去らず、またいつかは大きな悲劇が起りそうに思われて、不安の念に包まれ通しであったという。

このような自然的環境の不利、施設・設備の悪条件もさることながら、ここに学ぶ学生たちの精神面を強く支配したものは、オールバニーという町が置かれている孤獨な地理的位置、同時にまた彼等が、学問的な施設とふん囲気とから全く隔絶されたままに置かれていることから来る限りない寂寞感である。それはこの図書館学校が、コロンビア大学のそれとは異って、どのようなカレッジやユニバーシティとも結びつきをもたないままに、全く孤立した教育機関として存在していたことによるものであった。ミッチェル自身、オールバニーにおける日々の生活を通じ、片時としてそのような寂りょうの思いから解放される時はなかったという。

学生たちをとり囲んでいた以上のような諸条件にもまして、より深刻な問題は、教師たちがまた一種の疎外感につきまとわれていたことである。学生たちが、専攻を異にし、異った関心と観点とを提示するものたちと、自由に思想を交換したり、活発な討論を展開する場を持つことができず、図書館活動という単一分野に、とかく問題の焦点を限定され勝ちであった許りでなく、教師たちもまた、他の大学人たちとの集まりや交わり、またそれとの連携から受ける広い影響、総じて学問的なふん囲気から自分たちが常に孤立したままにしていることの強い意識であった。

もしも、コロンビア大学の図書館学校が、この大学によって継続されて行くことを保証されるまでデュイが留っていて、それが他の専門学部と同一の線に沿って発展して行くことができるのを見届けた上で、他の人に引き渡していたとすれば、アメリカにおける図書館学教育の初期の歴史は、恐らく非常に違ったものとなっていたであろう。

と云われているのは⁸⁰⁾、以上のような諸事情が、デュイおよびこの学校における図書館学の性格を規制するところ多かったと見做すものである。

デュイ退職後のことであるが、1911年3月29日この図書館学校は火災に見舞われ、諸記録・図書・備品類を焼失、ために州立師範学校(State Normal College)において一時授業を続行し、

80) *ibid.*

1912年10月からは、新築の州教育会館（State Education Building）の完成に伴って、その中で授業を行なうことになった。州議事堂内に在った当時に較べると、多少はゆとりのある場所が提供されることになったとはいえ、財政的な困難は常に克服されることなく、州の支出も至って僅少のままであり、結局この学校の卒業生による財政援助が、特に講師手当の不足をカバーする大きな支柱となった。1911年から16年に至る5カ年のこの金額は1万4,000ドル、それにも拘らず年と共に財政的なひっ迫は厳しさを加え、1920年には、同窓生たちが、とり敢えず爾後3カ年にわたり、年額3,000ドルの“卒業生による講師基金”（*alumni instructor fund*）を負担することとなったほどである⁸¹⁾。1920年代の半頃近くが、経済恐こうの余波をも受けて最も深刻な危機に直面した時期であり、1学期間の授業時間数も、自然それをもって卒業単位を充たしたものとするには不十分な実情にさえ追いこまれることとなった。この学校がやがて、ニューヨーク市公共図書館内の図書館学校と合せて、コロンビア大学に吸収されるようになった経緯には、このような事情もその背景となっている。

コロンビア大学から、オールバニーの図書館学校を同大学に‘移し返す’（*transfer back to Columbia*）要望がしきりに行なわれるようになったのは、1926年1月からのことであり、当時のコロンビア大学は、それを現在の大きな規模に拡張したパトラー総長（*Nicholas Murray Butler, 1862-1947*, 総長在任は1902-45）の在任時代であった。彼はノーベル平和賞の受賞者（1931）としても著名であるが、同時にまたデュイがこの大学に図書館学校を開設した当時の学生であり、デュイ苦難の詳細を知悉した人でもあった。この節コロンビア大学がその理由としたのは、この大学がいよいよ大規模な拡張計画に着手するようになったこと、そしてその計画の一環として、“図書館学の学校（学部）”（*a School of Library Science*）をその中に包摂する構想を抱いており、‘もともとこのコロンビア大学において発足を見た図書館学校を、もとの場所に持ち帰る’ことを承諾して貰いたいという意味のものであった。すなわち出来れば9月の新学期から、ニューヨーク市公共図書館のもの2つを併合することによって、“大学院課程図書館学校”（*Graduate Library School*）を新たに発足させたいというのがその意向であった。このような申出に対し、ニューヨーク州教育局がそれを受諾する回答を行なったのが4月8日付であり、その理由とされているのは、すべての点においてその方がはるかに便宜であり、それによってまた将来の維持が約束され得るという2つの点である。このようにして、至って円滑な形で、長年存続したオールバニーの図書館学校のコロンビア大学への移管契約が成立し、この大学にはまた37年という長い断絶の後、再び図書館学校が付設されることになった。現在の“*スクール・オブ・ライブラリー・サービス*”がすなわちそれである。

このような新しい事態は、デュイとの関連においていろいろに解釈されている。‘始めコロンビア大学は、要らないものとして取り除けて終った石を、こんどは逆に、その学問的な城塞

81) Trautman, R. : *ibid.* p. 26.

を、高く築き上げて行く上に、是非とも必要なものとして取り返して来た’ といっているのはその一例である。すなわちデュイ在職時代のコロンビア大学は、その規模において至って小さいものであり、従って大学当局が図書館学校を付設することについて、真面目な関心を示す段階からはなお程遠い実情にあった。しかしながら、それが次第に大きな規模に発展して来、また他の有力な大学の図書館学部が、すぐれた実績を重ね、堅実な歩みを続けるようになった以上、この大学としては最早、図書館学部を持たないままでは、全体としての学問的業績を高く築き上げている上からも、また教育機関としての面からも不可能と考えられるようになったからである。また別の面においては、かつてデュイをこの大学から追放する極め手とした女性の図書館学校への入学許可という問題も、この時代になって来ると、もはや一種のナンセンスであり、デュイがこの大学を去った翌年頃から、女子学生が次第に加わり、次表に示す通り1920年代に入ると、両者の差が10パーセント足らずに縮まり、1930年代では、終に女子学生の数が男子を凌ぐものとなっている⁸²⁾。

| 年 度 | 男子学生とその比率 | 女子学生とその比率 | 学生総数 |
|---------|--------------|--------------|--------|
| 1890—91 | 1,748 (97.3) | 49 (2.7) | 1,797 |
| 1900—01 | 2,675 (85.3) | 429 (14.7) | 3,086 |
| 1910—11 | 3,662 (62.1) | 2,231 (37.9) | 5,893 |
| 1920—21 | 5,316 (54.6) | 4,425 (45.4) | 9,741 |
| 1931—32 | 8,600 (49.1) | 8,923 (50.9) | 17,528 |

‘デュイが唱道してきた教育に対して有つ婦人の権利が、コロンビア大学によって、ここで、その勝利の承認を受けることになった’ とか、‘幸いにデュイは長寿を保ち得たために、コロンビア大学が彼に対して犯した非を終に認め、自分がその創始に培った開拓的な事業の成果が、この大学に喜んで迎え入れられて行く姿を、親しく目撃することができた’ と記しているのは⁸³⁾、デュイがコロンビア大学理事会から蒙った当初の敗北は、結局この時期になって、勝利への転換を遂げるに至ったとするものである。後年(1916)デュイが、1887年1月5日の図書館学校開設当時のことに思いを馳せ、

われわれは、各世代を通じて、その燈が間違いなく見下される火を点すことができた。いつも私は、「主」が、私をして別のモーゼたらしめ、イスラエルの別の子供たちを、約束の地に引率して行かしめ給うたことに対し、深甚なる感謝の念を抱いているものである⁸⁴⁾

と語っているように、自らが正しいと信じて敢行したことが、時の経過に伴なって次第に理解されて行き、彼が65歳に達したこの年には、確実にそれを当初意図していたところに到達せしめ得ることが明らかとなり、その喜びが同時に深い感謝の念に転じて行くようになったことを物語るものである。それから10年後の1926年が、すなわちコロンビア大学の中にニューヨーク州立図書館学校が吸収されて行った年であり、‘このようにコロンビア大学は自らの保護下に図書館学校

82) Dawe, G. G. : *ibid.* p. 197.

83) Dawe, G. G. : *ibid.* p. 196.

84) Rider, F. : *ibid.* p. 45 ; Dawe, G. G. : *ibid.* p. 191.

を持ち帰ることによって、ざっと40年程前には、あれほど屈辱的な形で取扱ったことに対する、デュイへの、恰好のよい償いを果すことになった⁸⁵⁾ という評言がなされている。

この年10月1日挙行されたこの新しい図書館学部の開校式典においては、初代学部長に就任したウィリアムソン (Charles C. Williamson)、ニューヨーク州立図書館学校第2代 (1906—8) 3代 (1908—26) の校長であったアンダスン (Edwin Hatfield Anderson) およびワイヤー (James Ingersoll Wyer)、コロンビア大学総長バトラーの外に、デュイによる演説が行なわれたが、その際彼は、演説の草稿として特に準備して来たものではなく、しかも至って早口で語ったために、辛うじて速記者が書き留め得たものも、ほんの2・3の、しかも全く断片的な事柄にすぎなかったという。従って、どのような順序と言葉とをもってそれがなされたかについての直接的な資料は現存しないが、その内容については、バトラー総長の語っているものによって今日に伝えられている⁸⁶⁾。すなわち‘ざっと40年前の不可解な時期に起った事柄についての真実’が、ありのままに彼によって語られ、従ってデュイの演説を聞きもらした人々は、‘コロンビア大学の、それほど古くない過去の姿を覗き見る、まことに得難い機会を惜しくも永遠に失ってしまうことになった’と記されている。そしてその真実というのは、全く‘奇妙な事態’であり、また実際には‘あり得べからざること’でもあったとバトラー総長は述べている。コロンビア大学がその間にたどった大きな変化を知ることができる。

12

デュイにおける“オールバニー時代”も、結局は“コロンビア大学時代”の繰り返してあったと云われるように、“闘争の時代”に終始した。事実彼は州立大学理事局の書記長に就任したその日から、大小様々な争いと衝突との連続の中に身を置き、その紛争はまた、理事会内のみならず、州行政部、州議会など、彼の業務に関連をもつ上位機関との間にも繰り展げられた非常に複雑な性格をもつものである。ただコロンビア大学時代のものが、図書館学校の問題を囲繞した形を執って展開されて行ったのに対して、オールバニー時代のものは、図書館・図書館学校と直接関係をもつものではなく、実はそれとは異質的な教育行政上の組織に関連するものであった。そしてこの面における彼の失脚が、図書館人としての地位、すなわち州立図書館長・州立図書館学校長の職に留まったままでいることを許さない事態に導いたものであった。実のところこの“オールバニー時代”におけるデュイの本務は、州立大学理事局の書記長、すなわち行政事務の責任者であったが、その州立大学 (University of the State of New York) というのは、今日における大学の概念とは、およそ縁遠い存在である。それは至ってユニークな機関 (unique body) であつたし、大学としてその実体を具えたものではなく、要するに“紙上の大学” (a paper university) に外ならなかったのである⁸⁷⁾。従って現在のニューヨーク州立大学 (1948年、33の

85) Rider, F. : *ibid.* p. 53-54.

86) Dawe, G. G. : *ibid.* p. 196-197.

87) *Library Journal*, Vol. 57, No. 3, Feb. 1, 1932. Melvil Dewey.

カレッジその他を統合したもの)とも何んらのつながりを持たないものである。主として“高等教育”(higher education)の行政事務を取扱う機関であったためにその名称が与えられたにすぎない。むしろ“大学局”ないしは“高等教育局”と呼ぶべき性格のものであった。しかしながらこの“大学”が実際に担当していた業務の中には中等教育も同時に含まれ、従って正しくは“高等・中等教育局”と称すべきものであったろう。その具体的な業務内容としては、高等・中等教育機関、州立図書館の管轄、それに教師を希望するものに対する試験検定、教師に対する資格認定、医学校の基準設定などがあった⁸⁸⁾。

州の教育行政は自然この“大学”の外に、初等教育を担当する機関との2つに分担された形を執って行なわれていた。それが公教育局(Dept. of Public Instruction)であり、また初等学校局(Elementary School Dept.)とも呼ばれていたものである。しかも“大学”とこの“局”との2つは、全く同位の関係に立ち、しかも名称上は両者の業務分担が明確であるかの如くに見えて、実はそれが至って大雑把で不明りょうであり、ために両者間の紛争と敵視が長く続き、大きな禍根を醸成し、デュイが書記長に就任した当時は、両者の対立が最も尖鋭化していたのみならず、“大学”の方が守勢に立ち、劣勢に追いこまれていたときであった。要するにこのような事態の招来は、当時“二重教育制度”(dual educational system)と呼ばれていたその変則的な形態にはい胎するものであり、その弊を革めようとして、当時の州知事ヒル(David Hill)が、1886年州議会に対して、“大学”の理事局廃止の提案を行なったことによって、事態は“大学”の方に至って不利な形で進行して来ていたのである。この場合における知事の見解は、財政的見地からいっても、2つのものの併存は無駄であり、またその必要もなく、“大学”の理事局を“公教育局”の方に統合してしまうことを得策とする点にあった。正しく“大学”の理事局は、知事のこのような政策と、“公教育局”からの攻勢の前に、その存在が危殆にひんしていた矢先であった。

1888年11月、デュイがリードを通じて、この“大学”理事局に提出した9カ条の覚書、またそれに基づいて理事局がデュイを書記長として迎え入れることを決定したのは、彼があくまでも“大学”の理事局を存続させて行くべきであるという主張であったために、彼を書記長に就任せしめることによって理事局の劣勢を挽回しようとするためであった。たしかに理事局の危機は、デュイを得たことによって一時的には去ったかの如く思われたにも拘らず、後には却って一段と強い圧力が加えられ、その鋒先は主としてデュイという人物、同時に彼が抱懐していた新しい方針そのものに対して向けられるようになった。そしてデュイを失脚せしめることによって一挙に理事局の廃止に持ちこまんとする方向を執ることになった。その結果は逆にデュイの存在が理事局の立場を不利にし、ために理事局内にはデュイを擁護する人々(pro-Dewey)と、反デュイ派(anti-Dewey)の2つが鋭く対立することになり、さながらそれは、彼のコロンビア大学時代

88) Mitchell, S. B. : *ibid.*

の姿をそのままに再現した形を呈することになった。事態をこのように険悪なものとした誘因について、それをデュイのもつ激しい性格、果敢な言動、妥協を求めない直情径行など、とかくその為人に帰そうとすることは、必ずしも正しいことではないかも知れない。しかしながらデュイの好敵手 (Dewey's rival) として⁸⁹⁾、1886年から1892年に至る間、“公教育局”の局長の地位に在った人がドレイパー (Dr. Andrew S. Draper) であり、性格的にデュイと酷似していたことが、一層両者の対立を険悪に導いたとも伝えられている。ライダーはこのことに関連して‘こうした事態の中で、相互に調整を保って行くことのできるの、ある非凡なコツを心得ている人か、あるいは協調面に鋭い感覚を身につけた人物でなければならないのに、ドレイパーにしても、またデュイにしても、ともにそうした才能とか感覚からは、まことに縁遠い存在であった’⁹⁰⁾と記している。従って相互に、領域の侵犯・勢力の拡大を図るものとして他を攻撃非難し、その結果は一先ずデュイおよび大学理事局側の勝利に帰した形を執り、ドレイパーは公教育局長の地位を去って他に転職することになった。後任はスキナー (Hom. Chas. R. Skinner) であり、このような紛争が州の教育界に及ぼす大きな影響について、それを憂慮する点においてはデュイと同じ意見の持主であった。

たしかにデュイには、この時期を境目として、その態度の上に根本的な変化が訪れている。すなわち“大学”と“公教育局”とを併合しようとするいわゆる“統一問題” (educational unification) の是非は、客観的にはどのようなであろうとも、何よりもこうした敵視と不和・摩さつの事態を鎮静に導くことが急務であるとする考え方であり、その方向に自らが主導的な役割を果たすべきであるという信念への転換である。デュイが

私は、2つの部局の間に存在している摩さつと不和以上に、過激な議論・誤解・誤伝などが、どんなに大きなものであるか、それのみならずそれが州の教育界をどれほど大きく傷つけているかという点においては、公教育局長のスキナーとその見解をいとしくするものである。若しこの州において、教育業務に携っている人々の間に、協調と平和とが保証され得るものであれば、如何なる個人的な機せいといえども、それほど大したことはないであろう⁹⁰⁾

と語り、さらに‘私という人物を、この論争から引っこめてしまうことを、自身いささかも厭うものではない’⁹¹⁾と付け加えているのは、明らかに自分自身を紛争の圏外に置き、それによって、とにもかくにも教育界のあつれきを平静にかえすことが、州のためには緊急であるとの判断に到達したことを示すものである。換言すれば辞職の決意を固めたことであり、1899年12月22日をもって、終に書記長としての地位を去ることになった。一意教育界のことをおもんばかつての措置であり、従って彼がその時まで堅持して来た“大学”の理事局存続の主張を覆した訳のものではなかった。

“統一”という問題にからまる紛争について言えば、1896年に、教育法 (educational law) を改正することによって、大学法 (university law) をその中に包含してしまふ提案が行われたとき、自分は時を移

89) Rider, F. : *ibid.* p. 93.

90) Rider, F. : *ibid.* p. 101.

さず、かつ強硬にそれに反対し、また抵抗しつづけて来た。それは“大学”が、大学法の下で、立派な仕事を実際に成し遂げて来たからであった…しかしながら“統一問題”に対し、私の行なった反論は、“大学理事會”の書記長としての私の権限を、初等教育の方にまで及ぼそうとして、殊更らに掻き立てているかのように言い触らされて来た。しかしながら自分は、一瞬たりといえども、そのような権限の拡大を望んだこととはなかった。それどころか自分は、普通学校の業務に対しては、深い敬意と賞讃とを捧げて来たものである。未だかつてその業務を自身で担当しようなどとは思ってもみなかった。実のところ自分は、27年も前に、生涯の職業としては、公共図書館に集注されて来る教育面のことを選んだものである。

と語っているのは⁹¹⁾、その間の事情と、また彼の心境とをよく物語っているものである。ここで彼が1896年の提案といっているのは、当時存在していた523の高等学校 (high schools) を、大学理事會の管轄から、初等教育局 (公教育局) の所管に移し替えようとするものであった。彼がその提案に抵抗しつづけて来たのは、それ自体で立派な業績を示して来た理事會の独立性を、従前のままに保持して行くべきであるという一貫した態度に基づいている。それにも拘らず、非難・攻撃が彼に向けられたのは、そのすべてが誤解・誤伝に発するものであり、事実と本意とも異なるものである以上、もともと自分にとってはむしろ関心外の分野であったこの学校行政の方からは身を退き、すでに青年時代、生涯にわたる職業として選んだ民衆教育 (popular education)、そのまた中核となるべき公共図書館の業務に復帰すべきであると悟るに至ったことを伝えているものである。このことは同時に、書記長辞職の後は州立図書館長の職務に専念し、傍ら州立図書館学校長として、専門図書館員の養成教育に従事することをもって、むしろ本望とするものであることを併せ表明したものである。

デュイの辞職は、反対派の人々のかっさいを博したのみならず、実は理事會内の彼の好き理解者であった親友たちまで、何かしらホットした安堵の思いをもって、それを承認したという⁹²⁾。いずれにしてもそれによって紛争の事態はとにかく鎮まり、理事會の危機も一応避け得られたかに見えたとはいうものの、結局理事會はデュイを失ったことによって、その時まで辛うじて守り続けて来た独立性に対する防壁を取り除かれた形になり、完全に反対派の手中に収められることになった。1904年における“統一法” (Unification Act) の州議會通過がそれであり、この法律によって、ニューヨーク州におけるあらゆる教育事務は、一人の行政首長 (one administrative head) によって掌握されることになった。しかもその首長の地位に返り咲いた人物が、かつては公教育局長としてデュイとの間に激しい摩擦を繰り返して来、1892年他職に転じたドレイパーその人であり、このドレイパーの復帰がとりも直さず‘デュイにとっては終末の始まりを告げるもの’となった。

いずれにしても、ドレイパーとデュイとの2人は、到底両立したままで居ることの出来難い人物であった。もちろんドレイパーが全権を担ってオールバニーに帰って来たとはいっても、直ちに彼がデュイ追放のための諸準備を慎重に開始したと解することは、必ずしも事実とは言えない。しかしながらまた逆に、デュイに対して彼が全く公平な態度を保っていたと見ることも、同程度に疑わしい。思うにドレイパーとしては、自

91) *ibid.*

92) Rider, F. : *ibid.* p. 92.

分の身近な地位に、デュイが就任したままでは、決して快いことではなかつたらう⁹³⁾。

と、その間の事情について語られているが、この言葉は、後に全く予期しない別の面から、新たにデュイに対する個人攻撃と、州立図書館長兼図書館学校長という州公務員の地位からの辞職を迫る事態が発生したとき、ドレイパーが、何んらデュイ擁護の積極的な態度を示そうとしなかつたことに関連してなされたものである。

その予期しない事態というのは、デュイ夫妻が、ニューヨーク州エセックス郡 (Essex County) で、“鏡湖” (Mirror Lake) を見下す景勝の地に、会員組織による“Lake Placid Club”を創ったことに端を発している。この地は夫人の妹 (Lydia B. Godfrey) が、40年間にわたって夏期を避けて滞在したところであり、また毎年枯草熱 (hay fever) に悩まされるデュイ夫妻がしばしば訪れたところでもあった。自分たちをも含めて枯草熱に苦しむ人々、また特に図書館人にとって手頃な休暇クラブの根拠を協同経営方式によってここに設けることを計画し、デュイが数名の友人にその案内状を発送したのが1893年、とりあえず義妹のケビンに接して、30名程度を取容することのできる一軒の家 (“Bonnie Blink”) を建設したのが、その具体的な第一歩であった。これが後には12個の建物、10,600エーカーを越える広大な地域、そしてすべての物資をここでまかなうことのできる自給地域にまで発展し、デュイの晩年には国際的にもその名が知られる程になった。

このクラブがデュイ攻撃、彼の公職からの追放要求の原因とされたことには2つの側面があった。その1つは、州公務員の地位にあるものが、このような事業に手を染めていることをもって不当とし、同時にまたデュイは当然公務を疎かにしているものだという非難である。もう1つの面は、このクラブがユダヤ人に対しては、その会員となることを拒んでいるとして、ライプティガー (Dr. Leipziger) を主導者とするユダヤ人団体から加えられた執ような攻撃であった⁹⁴⁾。そして州当局に対してデュイの公職追放を要求したことである。正しく3つに重なり合った悪条件の前に立たされて、結局デュイは、クラブの事業を放棄すべきであるか、さもなくば一切の公職から身を引くべきであるか、いずれか1つを選ばざるを得なくなったが、終に1905年9月21日をもって州立図書館長ならびに州立図書館学校長の職を退くことになった。これが事実上彼の教育界・図書館界・図書館学教育界からの引退であり、その後は1918年サラトガ (Saratoga, N. Y.) において開催されたアメリカ図書館協会の総会、1926年の同協会創立50周年の祝賀式典に参列した程度で、ほとんど図書館界にその姿を見せることはなかつたという。しかも引退後間もなくのこと、彼は30年の昔、自身主導的な役割を果たして結成したアメリカ図書館協会からも、危うく追放されそうな事態に身をおくことになった。それは誤まった指導に引きずられた一部の人々による運動であったと記されているが⁹⁵⁾、事の起りは、男女両性の関係について、デュイが抱懐して

93) Rider, F. : *ibid.* p. 101.

94) Rider, F. : *ibid.* p. 104.

95) Mitchell, S. B. : *ibid.*

いると見做されたある思想を採り上げ、それを糾弾することになった。いまその思想が具体的にどのようなものであったか明らかになし得ないが、‘デュイがそのような考え方をもっていたことは、極めてあり得ることだ’とミッチェルは述べている。いずれにしても、館界から引退することになった直後、あたかもそれに追い討ちをかける形で、図書館協会からの除名運動が展開されたことは、デュイにとって、まことに大きな衝撃を与えたに違いない。年令的には、55歳という至って充実したときであったにも拘らず、爾後図書館界との公的なつながりを持とうとしなかった背後には、このような事情も、深くその根を下ろしていたであろう。

13

1920年(69歳)デュイは、彼が創案した“十進分類法”の起源に言及した一文の中で、彼と図書館との、そもそもの結びつきについて語っている。すなわち彼が少年時代の夢として最初に描いたのは、大学教授になることであり、アマスト大学(Amherst College, Mass., 1821年創立)に入学(1870)した後は、宣教師となってトルコに赴き、この地で布教に従うことを真剣に考えたある時期があったにも拘らず、この考えは、“民衆教育”(popular education)をもって、自分のライフ・ワークとする決心を固めた時をもって消え失せ、その民衆教育に関連をもつ機関の中で、将来最も推進されなければならないものとして公共図書館(パブリック・ライブラリー)のことに想到し、結局自分の生涯の職業としては、この図書館に集注されて来る教育面の問題を選ぶに至ったと述べている。

その節彼の心を強く撃った1つの事実は、当時においてはなお、アメリカ人中の90パーセントという多くが、小学校を卒っただけで、直ちにパンを求めて社会に出て行かなければならなかったその統計的な数字であったという。すなわち国民の大多数が、この初等教育を基礎に、その後の長い人生に及んで、本当の教育を進んで身につけて行こうとする場合、その要求に応えるものとして、社会的な体制としては何が準備され、強力に促進されて行かなければならないかが、彼の大きな関心事であった。この課題に直面したとき‘自分の心の中に、明確な姿を執って大きくその姿を現わしたものは、真の民衆大学 true peoples' university としての、フリー・パブリック・ライブラリーであった’と記している。このような図書館は彼の場合、学校教育との関連から、当然授業料を徴収しないいわゆる“無謝公立学校”(free public school)の継続あるいはそれに対置するものとして先ず意識されている。

無謝公立学校は、文化ならびに進歩に対する本質的な要素としてその地位を獲得した。したがって私が過去行って来た組織的な活動は、図書館というものが、学校とともに同様本質的なものであり、従ってひとしく公税によって維持され、公立学校を必然的に補うものとして発展することを実証するにあった。

と述べているのは、その間のいきさつを伝えているものである。同時にデュイは、教育という言葉によって一般の人々が意識しているところが至って狭義・限定的で、要するに幼稚園から大学

96) Melvil Dewey : Decimal classification beginnings. *Library Journal*, Vol. 5 (No. 4, Feb. 15) 1920. p. 151-154.

までの一連であり、また大学を卒業することによって完結するものと見做している点を指摘して、‘明らかにそれは、自分の持っている時間の全部を、通学することだけに費している人々に対して与えるものが教育であると、普通考えられているが、教育には実はそれとは別のもう1つの側面がある’ことを強調し、それは短期間のものではなくて生涯にわたるものであり、学校限りのものではなくて、家庭に在る間を通じての教育、また主要な職業と並行して継続して行なわれるものであり、その方が学校教育に比較してはるかに重要であるとするのが彼の考え方であった。彼がしばしば使っている“家庭教育”(home education)という言葉は、一家庭内の生活や環境、父兄・母姉などから受ける影響・教化といった狭いものではなく、学校教育以外のものすべてを指しているように思われる。そして彼においては、この“家庭教育”を分担するものとして、図書館・博物館・倶楽部・延長教育(extension teaching)それに試験および免許状の5種類が挙げられており、しかも学校といった場合、それには初等・中等学校、カレッジ、専門学校、ユニバーシティなどの総てが内包されていると同じように、図書館といった場合においても、他の4つのものを総括した謂わば総合名称であるというのが、彼の図書館観であった。1888年コロンビア大学図書館において、一般大衆を対象とした5つの無料公開講座を開設したのも、この考え方に基づくものであったが、それは自分の関心をもつ課題と住所との2つを届け出ることによって、関心部門の講座が開かれる都度連絡を受けるという仕組みであった⁹⁷⁾。すなわち彼における図書館活動は、そのまま今日における成人教育活動に連なっており、その点についてブラウン(Charles H. Brown)は、今日における成人教育の発展は、デュイによつて的確に予想されていたものである。またこの教育が、公共図書館に依存するものである点についても、成人教育(adult education)という言葉が一般化して来る25年も前に、すでにデュイによつて慎重に叙述されたところである’と語っている⁹⁸⁾。

デュイにおける公共図書館は、ただ単に学校教育に対置するものとして捉えられているのではなく、彼が教育に対して抱いていた一つの信念、すなわち三位一体(trinity)の思想と深く結びついている。その三位とは公立学校・教会・それに公共図書館であり、この3つの姿を通じて人間形成に培われて行くところに教育があるという思想であった。そのうち公立学校は、人間形成の土台・教育に対する基盤を提供するところ、教会は道徳教授の場であり、精神的な人間を尊重し擁護することによって、人間形成の一面を担当し、これに対して公共図書館は、階級・宗派・貧富など、すべての区別と差別とに超越して、広範かつ全般にわたる修練の場を準備することによって、人間形成のまた別の側面を担うものであるとする考え方であった。従つてデュイにおいては、公立学校がつくれ、教会が設けられて行くところには、当然公共図書館的な施設が伴って行かねばならないという立場で、その将来を展望し、またその発展を期する努力が傾けられている。図書館の発達を図らんがための、彼のほげしい精神的な息吹きは、実はこのような思想

97) Dawe, G. G. : *ibid.* p. 291-292.

98) Dawe, G. G. : *ibid.* p. 195-196.

的立場から発せられているのである。1886年3月19日、デュイがなおコロンビア大学図書館長として在職していた当時、“ボストン・ヘラルド”紙の記者によるインター・ビューに際して、公共図書館の意義と価値とが正しく、しかも全面的に認識される時期の到来には、それほど多くの年数を必要としないであろうし、小規模の図書館なら、教会や学校の存在する限りどこにおいても見られるようになり、少くとも町 (town) と呼ばれている場所ともなれば、それがどんなに小さいものであっても、残らず図書館を持つような時期が必ず訪れるに違いないと語っている言葉は⁹⁹⁾、上述の事情をよく伝えているものである。しかも、アメリカ全人口の90パーセントを占める人々の教育に直接関連をもつ民衆・成人教育、その中核に位置するものが公共図書館であるとするデュイの根本的な立場は、図書館学教育の面においても直接深い繋がりをもつものである。

14

1900年といえば、デュイが州立大学理事局書記長の地位を去って、州立図書館長専任となり、かたわら州立図書館学校長を兼ねるようになった直後のことであるが、その時まで図書館学校の歩んで来た足跡を振り返って

自分が予言しておった通りに、この図書館学校は、学校の教師を養成するための、最初の師範学校が創設されたのと同じような重要性をもったものであることを証明して来た。すなわち若しこの学校がなかったとしたら、アメリカの図書館は学校をカバーするために必要な機関としての、その十分な地位を、民衆教育の、完全で満足すべき組織において達成することは、到底できないことであっただろう。

と語っている¹⁰⁰⁾。すなわち彼は専門図書館員の養成を、学校における教師養成と対置して考え、正規に教育を受けた図書館員が、図書館を通じての民衆教育の発展に寄与することの如何に大きかったかについて言及している。しかしながら彼がここで図書館と記しているのは、あくまでも公共図書館の意味であって、彼における図書館学教育の対象は、この公共図書館を中心としたものであったことを同時に物語るものである。この点において、図書館員の教育とか、その養成について、当時の人々が一般に抱いていた観念との間にも食い違いがある。

1750年、ローガン (James Logan, 1674-1751) が、図書館員に対して、ラテン語で書かれている古典類を翻訳し、文体解剖を行ない、ギリシャ語原文の新約聖書、ホーマーやヘシオドスのものなどについて、総括的な知識と理解とを持つ能力を要求している言葉を遺しているのは¹⁰¹⁾、はっきりと図書館員の資格について言及している初期の事例であるが、古文書に対する知識、その前提となる古典語の理解が、彼の場合においては、図書館員となるために求められた条件であった。ローガンは現にフィラデルフィア図書館会社と一体の関係で運営されている“ローガン文

99) Dawe, G. G. : *ibid.* p. 294.

100) Dewey, Melvil : New York State Library School. *Library Journal*, Vol. 25, (No. 2, Feb.), 1900.

101) Predeek, Albert : *ibid.* p. 124.

庫” (Loganian Library) の創設者であり、従って稀こう書の収集家として、その立場において為された謂わば当然の要請であったということができよう。同時にこれは同様の取書方針に立っている特殊図書館の場合においては、今日にあっては依然として求められている条件である。

またすでに述べたウィリアム・プールが、すでに1876年「図書館員の業務は1つの専門職である¹⁰²⁾」と言明しているのは、その専門職性を掲げた比較的初期のものとして特筆すべきであるが、それにも拘らず、彼がデュイの図書館学校創設の提案に対してはげしく反対したのは、現職者に対する館内教育の方法をなお維持して行くべきであるという立場であり、従ってデュイの構想はなお早きに失するという考え方からであった。議院図書館を始め、ハーバード大学、ボストン・アセニウム、ボストン公共図書館、シカゴ公共図書館など、当時における主導的な図書館において行なわれていたのが、この一館的な館内教育であり、要するにデュイの提案に対する強い疑念と消極性、同時に現実に行なわれている方法に対する保守性が強く支配している。ジョンソン (Elmer D. Johnson) が指摘しているように¹⁰³⁾、館内教育に固執する態度が19世紀の終りにおいて支配的であったのは、イギリスにおける図書館員教育が、徒弟的なもの (apprenticeship) であったことにも、深いつながりなしとしないであろう。事実イギリスは、20世紀に入って以後も、大学において正規の図書館学教育課程を発足させることに対しては、いわゆる実地教育主義者 (practicalists) と呼ばれる保守的な図書館人の強固な抵抗が見られた国であった。そして1919年、ロンドン大学内に図書館学部が創設されるまでは、どのような低い基準のものといえども、正規の学校教育は、図書館学に関する限り存在しなかった国でもある¹⁰⁴⁾。

デュイが図書館学校の教科内容について、古代学的、換言すれば歴史的な諸学科は、それが特に必要な場合のみに限り、原則的には除外する方針を執ったのは、そのような知識を必要とするのは学術図書館や大学のそれであり、一般公共図書館においては、それ以上に重要なものがあると考えたからであった。その点ローガンの要求に沿うものでもなかった。同時にまた図書館学校の設立は、それ自体、当時支配的であった伝統的な館内教育に対しては正面からの挑戦を意味するものであった。デュイにおいては、既設の図書館の中で、その図書館における定型的な業務を身につけることが重要であったのではなく、新しい公共図書館が次々につくられて行くことを前提に、その運営に携わり、民衆教育の推進勢力となって行く新しい意味の図書館員の養成こそ緊急であるとしていたからである。

シカゴ大学のカーノブスキー教授 (Leon Carnovsky) が、学術図書館の司書養成に主力が注がれているドイツの図書館学教育に対して、アメリカのそれは全く対照的であるといっているのは¹⁰⁵⁾、デュイによって切り拓かれたこのような教育の伝統について述べたものであり、ヨーロッパ

102) U. S. Bureau of Education : *ibid.* p. 489.

103) Johnson, Elmer D. : A concise introduction to the history of the alphabet, writing, printing, books and libraries. New Brunswick, N. J., Scarecrow Press, 1955. p. 186.

104) 小倉親雄：図書館学教育の諸類型 京都大学教育学部紀要第6号 昭和35

105) Carnovsky, Leon : Education for librarianship abroad, in Barnard Berelson ed. Education for librarianship. Chic., ALA., 1949. p. 77-78.

人によって批判されて来たところも、アメリカにおける図書館学校の教科内容が、もともと公共図書館を中心として構成されて来たために、その性格、内容、程度において全く別個のものであるとする立場に、その多くのものが集注されている。

そのみならず、アメリカ国内においても、デュイの図書館学教育が至って偏狭なものであり、内容・程度双方に亘って、限定的な性格をもつものであることを指摘し、それを批判する声は、その当初からすでに存在している。1890年リチャードソン (Ernest Cushing Richardson) が、コロンビア大学図書館学校について

この学校が目標としているのは、ただライブラリー・エコノミーを教えることであり、従ってライブラリー・サイエンスの領域を覆う形をほとんどなしていない。その点まことに遺憾であり、将来においては、大いに為すところあらんとする図書館員に、基礎的に求められる分野のすべてを包含して行くよう、教科内容の拡大が図られねばならない¹⁰⁶⁾。

としているが如きがそれである。この場合のライブラリー・サイエンスとは、書誌学、それに写本類の処理について研究する学問の意味であったが、特にリチャードソンは、この学校においては書誌学が、細かな事務的な技術面のむしろ下位に置かれ、総体的にいて本質的なものの前に、実務的なものが位置し、その点における“教授方法の非科学生”を指摘したものである。しかしながらデュイによって描かれていた図書館学校は、ブライアン (Alice Bryan) も述べているように¹⁰⁷⁾、何よりもまず図書館業務の技術的な処理、特にその統一技術を教授するところ、またそのような統一なものを普及して行くためにそこを巣立って行く1つのセンターともいうべきものであり、従って多くの時間が、限られた領域のもの、ならびに実務的なものに充当される形を執るものとなった。しかもデュイのものに続く初期の図書館学校が、いずれも教科内容の構成にあたって、その形態を踏襲することによって、“極端な技術”という言葉で表現される“デュイ的伝統”を形成して行くことにもなった。1920年代は、このような伝統的な教育形態に対するきびしい批判と、また新しいものへの転換を目指す重要な時期であり、その重要な契機をつくったものが、いわゆる“ウィリアムソン報告” (Williamson's Report) である¹⁰⁸⁾。しかしながらデュイにおけるその構想と実践とは、特に公共図書館の急速な発展を念じた彼自身の立場において、もちろん大きな限界をもつものではあったが、それ自体また重要な歴史的意義を担っているものである。

デュイの図書館との結びつきは、大多数の国民が初等教育のみをもって社会で活躍している当時の現実に対する直視、それらの人々を対象とした民衆教育の重要性への想到、その中心となるべき公共図書館の発展を期待したところに発しているが、彼の図書館学教育の確立に対する異状

106) Berelson, Barnard ed. : Education for librarianship. Chic., ALA., 1949. p. 60.

107) Bryan, Alice, I. ed. : The public librarian. N. Y., Columbia Univ. Press., 1952. p. 310.

108) 小倉親雄：“ウィリアムソン報告”と図書館学教育 京都大学アメリカ研究所シリーズⅡ昭和41年3月

小倉：メルビル・デュイと図書館学教育

な努力もまた、すぐれた図書館員の養成が、そのような発展の前提として映じたからであった。しかしながらその教育を確立して行く過程において、余りにも多くの障害と苦難とを体験しなければならなかったのがデュイであり、そのことは同時に、彼の図書館学教育の実践の上に多くの限界を残すものとなっている。もちろん彼の思想そのものも、またその実践も、その当初から、また現代においても、多くの人々による批判の対象とはなっているが、それ自体がもつ意義は、改めて深く考究されねばならないものがあるであろう。